廣恵濟急方　上巻

序
例言
卒倒之類

和書門
類
二八〇六　三號
七十六　函
七　架
三　冊

内閣文庫
一九五
二八
三
和

内閣文庫

番號	和	28063
冊數	3	(1)
函號	195	35

Kodak Gray Scale
糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
原本の文字など不明瞭な箇所があり
国立公文書館
National Archives of Japan

寛政元年開鐫

廣惠濟急方

躋壽館藏版

明治十四年購求

序

濟急方刻成。安元謂余曰。此是

先大君仁民之一事。獨序此書者非足

下不可。余駭而問故。乃徐誦余曰。距

今十數年矣。

先大君一日召臣而問曰。及聞民間疾

疫方其急遽之際無遑請醫或僻遠乏醫雖請途遥或夜間若阻事而不來遂至不可救者往往而有是可憫矣豈無有救急之方可以備不虞者歟臣不敢妄對退而思之蓋救濟方法非無其書但山野小民亦能可蓄可辨其可以當

上旨者未之有也於是日夜涉獵諸方書隨得而抄錄東蠻之奇與夫俗間所傳亦皆采擇不遺裒而成卷因施諸行事而歷試其功驗亦有年所已五更其稿而未成書爾後

先大君。燕聞時召侍醫。而聞民間疾疫。
元悳亦在末。則五內為之如燬痛。思
奉職無狀。而無副仁民之
台慮。憤悶將疾矣。既而
先大君薨。捐萬民。元悳慟哭。不能起者
數日矣。然日夜督兒元簡等就事竟

至今春而書始脫稿焉。足下久陪侍
帷幄。而與聞其
明命矣。是故敢需一言焉。爾義行受
而未閱卷。愀然酸鼻。亦將慟矣。於乎
先大君深仁廣德。無得而稱哉。安元能
體

上言而盡力其職永輔其仁於下焉
誰不嘉賞乎余雖不敏豈可不文爲
解蔽其忠誠哉乃錄其語以爲之序
若夫其書之精選何竢余言四海之
民得之則安不得即苦譬之非大旱
之膏雨則中流一壺雖欲不貴得乎

欲使山野小民常讀而熟知故俚語
以國字云安元其氏多紀令嗣字安
長亦爲通家久矣

寛政紀元歳次己酉十一月冬至日

肥前守從五位下佐野義行撰

それ神よの世よりおほむかしまで医方
ひさしきことはいふもさらなり神代より
ちかく醫療乃みち今につたはりて後世
の為まさに百草能なめらかくすくはれまへるを
乃そく此きしへとこにらも小あらぬを
生存のこゝろにかゝはりて人至仁愛乃體
とは前しせあふさるゝしをも安氣の法
東乃御めくみふかくもし給はぬある

ま民のやまひあらんことをうれへ給ひて
おほやけのくすしさせんをわすれ給はし
ことさらにつぎて侍醫とめしてハ医める
ことらく多おもよにをとかりてことのあまね
きまでを此世にひろめんことのおもむきの
春多紀元悳に仰下されしとよ抄述
り急病のはいにのそみて医を
志ふまなくきをかうむりぬるといへ

海邊なる家ハ里にさへもあなまりにく窮
巷なとにはる名もしるしとどもへさき術をもしらぬ
山ざとはらふにいのちおとしぬるもの
えかのるひて病時いふらん拾されは関ひ
またくふ医さ経験乃方を集し目録く
さはく種まして此くもともよさし
書あらふ元乃事にしてうをゑまる序
傳達せしそのことの殿にかけぬるおもひ

のくらし浪くこの教かしこき我が國俗く
まゐ志らしめんハもとより経のふることを
あ遠ハなくて是乃郡乃家々につとへ始る
心ところさしをひとつにしぼるなれバもとの
國おもてなども遠くもろもろ紀の記録くあつめ
すぐれぬる我がなも西華まゐ際と始さて
書なる姓豪よ天明七年の春にかなん
名つけて濟急方といふさ俗りし志義

治めくみさとめてかく世乃きのこと於ある
始へやことふそこそと此のまの依も知したもま
ころなしいのち臺台より雲かく達寿なへて
此おの紀をと御論ハ是そならんさらしさかく
流血帙より接くく絵るふ小合あるがゆゑ
御世つのせおハし海なくかの数志ゆくとも
うらさとの猪りそての
おのれ遊ぶを世小あらハしかけむとぬみの

生育をたもしめんとて此書を述たり
しめよとへつきよし命下りまかりよ益
民乃御まつりことをいやけきにおふま
なおぬ志れかはしめ仰志とうけ給りお
つて人業数せし三嶋但馬守政喜かの清翰
うけりしめ縁と同しれハあらぬし成
志るし置く元乃里か志ふよまうせこゑ
川かみしかを業とさるてとたつありと

以ふ

寛政元年秋八月

中埜監物藤原清翰謹識

例言

一 凡人疾病あらバ醫師に療理を請こと古今の法にして病を慎の道なり然れども暴病あるに臨てハ海隅山陬の民ハ勿論通邑大都といへども折あしけれバ醫を邀へ来らず他醫を引とも至らず此時に當りてハ智者と謀を設遑き地なく勇者も斷べき處なく白刃も踏こ

爵禄ハ辭するとも此一事におゐてハ
胸中惑亂して收拾すべき處なく人世
中あるまじき事ハ俄に起りしがごとく
婦人女子と一般に狼狽周章忠肝孝心
の士も亦祈請誠を盡し身を以て代り
てん程に思ひ迫りて病の虚實をもしらず
藥劑の避就を辨ぜず妄りに圓丸艾灸を
施し虚するを瀉し實なるを補ひ遂に

活をうる人をして異物となさしむるに
至れり療理法ハすくなくして死ハ命なりと誤
藥なくして殺ハ横夭なり實に可嘆し故に
一服の藥一壯の灸も大なる誤なく生を
萬一に望しもとめん為に是此篇の撰ある
所以なり
一經傳子史の寶典といへども讀ざれバ其
用瓦礫に劣れり本編舊綴るに漢文を

以て今改て國字をもてするハ病家の人も
して讀で其義を曉志めんが為なり濟
生に志あらん人ハ預熟讀して其大意
を解釋し更日常一通も座右にしく
急に臨て遺忘に備へし豫熟讀して
其大意を得ざれバ事に臨必ず誤るを
多く彼渴して井を穿るが如くなるべし
一凡人疾病ありて療理を施さんとせバ先

其病證を視定べし病證を認ざるうちに
く鍼灸藥等の相對すべき理法を施す
事にして古人も百方の藥を探索するハ
一病證を認ふ志ゑといへ里總人の病に
病因病證といふ事あり病因とハ病の根
本なり草木の根あるがごとし病證とハ病
の狀外にあらハれたるをいふ草木の枝葉
あるがごとし病内にありといへども其證外

よりかゝらざれバ何れの病なるを知るべく
かの所猶草木の秋冬に枯凋て枝葉なき
ときハ何れの草木なるを志るべからざれ共
がごとし春夏枝葉生るに依て其物を識得る
一般にして人の病も其證外に見る故何れ
の病なるを弁別すべきなり此故に斯編各
門の首に病證を載て其大略を見して後
に方術を擧たり毫髪の見誤ハ人を瞬息

の間に斃すことあれバ最戦兢を加へて忽諸
にすべからず
一通編の諸論皆古人の成説中に於て最精覈に
して今に試て符合する者を撰採て毫
釐も無稽を憶説なし方薬ハ古今
一華夷を論ぜず藪澤中の方といへども盡
諸家の方書幷に本草に照し考へ数試て
數驗を奏する者にして病家倉卒の用

り便ならざる者を撰ミて故ニ其方二三味に過ぎ採索るに易く取まるなり

一病名古今同じからざれバ且正名あり謬名あり大抵古名を穏當とし次ニ假令卒倒人事を不省の證ある後世卒中風と稱して素問ニ云る古紀書物にハ擊仆と謂七情鬱結して（七情とハ憂思喜怒悲驚恐を云）昏冒なるを素問に氣厥と以ハ是後世これを中氣（許叔微と言る人の本事方と云書に始めて此名出を）め名づく中とハ外來の邪物に中るをいふ中風中毒の類是なり内七情の過極さるより發たる病ある中と稱するハ謬りなるべし卒倒乃證原一樣なれバ然るを一槩に卒中風と呼るも名ハ實と當らざるなり似たり擊仆氣厥の正名あして穏當なるに志かざるなり然れども本編各門の病名ハ皆古今正謬を論ぜバ治

習久しく志く世人の聞覺ある者に從
へるも亦唯俗便り取るなり
一其用を識ざれバ奇藥靈劑も病を治す
事に益なし獲難の藥と亦其時に用
ゆるさゞれバ其能を識ときハ眼前物とし
て良藥ならざるなし且急に臨く最
其用をなすに足今編中用所の藥品
ハ病家倉猝の際探索に便なる物を擇

く獲がたき品を載せれバ大抵味噌鹽
酢酒或ハ蔬菜魚類を他人家日用する品に
く有合すべき物を撰用なり已ことを
得ざるに至りて藥鋪鬻所の物を用ゆ必
細書して藥店にあるを註し置たり生
草本も亦人家園庭中に栽たる物或ハ道
傍原野に在所の品を撰用し採摘こと
易に取まり且地方異なれバ産物殊なり

時移バ物亦易此ニ有て彼ニ無物なり若木ニ縁て魚を求め海ニ入て玉を索バ獲事かたかるに極る此故ニ本編中一病證ニ付て數方を臚列するハ其地方ニ就て用ゆるを志らしめんか為なり敢て博ニ驚るニハあらず

一凡生草木の形状を本草といへる書ニ説ところハ皆他の艸木乃枝葉花實乃態相

似たる物を以て比諭をとる事多し此編ハ醫家の設なれバ此學に心會なき人ニ指示とするなれバ其比なき草木など亦識ざる人多く地方異なれバ名も殊なる故今直ニ其形像を圖して略其説を載せあり圖ハ春夏秋三時の形状を寫して其態度を志るしむ然れども土地ニ沃土瘠土山陵卑濕乃同じからざるなり又陽

地陰地の別あり其産する所の地に因て
形状色相頗異同あることあれバ亦必如
此と言ことなし此に写所ハ東都の人家
園庭に栽物或ハ近郊に産する所なる物
を採て真写にせしなれバ恐らくハ関
西或ハ南北方土の地に産する物と違へるも
あらんすれバ観者心を用て仔細に弁
最疑しきハ須其師に就て研究すべし

一凡薬物ハ其証に依て効験を奏すること
にして有毒の故によるにあらず無毒
の故によるにもあらず其証と対すれバ皆効
あり対せざる時ハ倶害あり假令磁石の如く鍼
を引ども芥を拾ふこと能ハず琥珀の如く芥
を拾ふといへども鍼を引ことあたハず是等の
事を見て解釈すべし物類の相感ずるに
れバ誣ふべからざる所なり然れども其病

を認るをハ老醫といへども誤るもの也と言難し古人の詩にも老醫迷舊疾と言句あり況病家の人の視定難きありけれバ此編毎用乃藥品可成丈ハ緩劑を用て峻劑撃劑を用ひ假令吐劑ぞ如も鹽湯虀汁の類を用て瓜蒂藜蘆乃類を用ゐず如何なれバ若誤用すとも緩劑ハ害なきと亦緩なりけれバ遅しといへども

醫師來らバ手段もあるべし峻烈の藥にして誤用バ害も亦はげしあやまれバ手を下し難き地に至る凡峻劑を用ひとしかしバ用とハ醫師の手眼にあることなる故手眼なき郷鄙の人に峻藥を授用しむるハ暗室中に集會して一人劍を抜く舞がごとく人を傷ざることハ幾希なるべし

一 凡病の見ゆる證によりて見受たる所ハ同様

なるに似て虚實は同じからざる所あり寒
熱の遁に違る者あり若混殽するときは
利害掌を翻の間にありて仔細に辨別せずん
ばあるべからず此故に醫家には診法多端
なれども約り其法病人の顔色眼中の精彩
を望聲音を聞病情を問脉の至數動靜
を切且胸腹背脊より四末を摸索めて邪
物の有無を責其他種々の診法を以て彼

此參伍して異同互に證し其隱微なるを
搜く何れの病と決斷することあり矧病
癥の中に眞寒假熱假寒眞熱とて似て
非なるものありて良醫も失診をすること
ありて然るに今醫事を志ざる人をして
紙上の說に依其證を辨ぜしめんことを欲望
は最得がたかるに必せり本編聊醫事の
大體を失ざるに似ていへども其診法を悉

盡こと能ハざれ是故よ醫師來らすバ遲延りし
委付く此編の論説ふ拘泥べからず

一 脈ハ醫家四診の一にして病を視定るに
ハ闕べからざる所なり然るに晋の王叔
和と云人心中明にし易く指下ハ了じ
難しと言り心を潜思を覃して習熟
せざれバ得難きなりまバなり唐の孫
思邈と云人も脈ハ醫の大業也と云るも

となりしを然るを今病家の人に曉し
免んとせるハ絶くなき事に極まり
故よ編中脈法を言及さず

一 凡灸穴を取の法諸書載る所の説を参考
て古を準とし今を酌く正穴を得せし
め且捷徑にして病家の人の極く曉し
易き法を採く擧とすれども二なのる
全く得がたし故よ今紙上の文字に就く

正穴を得べき法を取て捷法といへども口授なくしてハ當らざるの法を載ず

一凡孔穴を點して灸する其法其人立て點じたるハ立て灸し坐して點じたるハ坐して灸すべし臥て點じたるも同じ總て人の皮膚筋骨ともに坐臥に隨ひ申縮ある者なれバ坐臥に依て體たがひ穴所も亦たがふゆへなりこれに由て舊灸の痕ありとも若卒倒して側臥或ハ偃臥さバ灸痕自ら違ふ事あらんすれバ只正穴に點して灸すべし編中灸穴の圖説を載といへども言ハ意を盡さゞれバ少く齟齬するに似さ數もあらんなれど此意をもて斟酌して其穴を取んにハ大なる誤なからん庶幾るべし

一凡醫方の原を考究むるも亦一大業と言

一 へいし近來諸家編集の方書を閲するに往々謬誤あり況管見蠡識にして倉卒に論定すべきにあらず且此編撰用する所の者ハ一方といへども必諸家の方書に參て同異を攷最歷試乃方中に於て病家所用に便宜とするを採るなり故に姑く救急易方危證簡便驗方等の例に從て方の出所を附載せず

例言畢

廣惠濟急方上卷目錄

一 卒倒之類 人俄にたをるゝ病の類ハ茲に集む

中風 一丁 氣ぬけうしなひ半身手脚きかず目口ゆがむ證なり

脫陽 十五丁 元氣俄に脫し氣ぬけうしなふなり又大下し大に吐て後昏憒となる證を附錄す

交接昏迷 二十一丁 男子交合時氣ぬけうしなふなり走陽とも 男子交合のとき精もれてやまざるを附す

中氣 二十三丁 いかりに氣ふさぎたをるゝなり

痰厥 二十五丁 痰厥ハ痰に壅て氣をうしなふなり

中暑 二十六丁 暑に中り倒れ死するなり

入井悶冒 二十九丁
舊井窖中の内に入て惡氣に中りてことをとるをなり

食厥 三十一丁
食にあたりて倒るゝなり

驚怖卒死 三十三丁
ものおそろしきによりて死まいるなり

霍亂 三十五丁
卒に心腹急しく疼痛大に苦痛するなり此證二つあり 上吐下瀉して苦しむと吐瀉なくて苦しむとなり詳に本條に載す

疔毒昏憒 四十九丁
疔の出來る初に何ともなくば俄に氣を失ふ 疔の理法なし疔の理法を附くり

脚氣衝心 六十丁
脚氣乃毒脚より腹に入て むなさきへせきあぐるなり

積氣暈倒 六十七丁
積氣上へつきあげ氣絶するなり 病氣なく衝逆あるのも茲に附す

癲癇 七十一丁
てんかんにて卒に氣絶するなり

血厥 七十二丁
人卒に死人のごとくになるなり 婦人に多し

波也宇知加太 七十四丁

鍼暈 七十六丁
はりして目をまはすなり

入浴暈倒 七十七丁
湯氣に中る なり

酔船 七十八丁
ふねによふなり かごによひ山によひしを附す

廣恵濟急方上巻

法眼侍醫多紀安元丹波元悳編輯
男安長元簡 挍

卒倒之類

人の卒にたをるゝ病の類ハこゝに載

中風

閉脱の二證あり閉ハ實證なり脱ハ虚證なり

閉證病狀

人卒に倒れ奄忽人事をしらず歯をくひしばめ拳を握り痰潮ごとく喘息し眼口ゆがみ半身かなハずして眼を見はり或上竄するハ中風の閉證也

なる者是也
凡卒倒して口ひつき手撒眼或合大便又ハ小
便をもらし鼻聲鼾のぬくなるハ脱證ニて虚
候とハ別ニ療法ハ後條ニ載たり實證ニも
目瞑大小便秘らすふ者ありといへども其口
噤手を握るをもって實候とも虚候ニ口と手も
ともニ開く是其證候ハおのづから同じからさ
る事なり若視あやまつ時ハ療法も亦大ニ

誤る心を用ひて診すべし
療法　卒然昏倒きバ先扶して煖なる室ニ入て噴
嚏を出す法を用ゆ可し其方ハ皂莢細辛等分末
となし又ハ天南星半夏（四味共ニ薬舗ニ有購ふし）の末を鼻
の孔内へ吹入る可し右の薬なきときハ胡椒
乃粉を吹入てよし急ニ胡椒もなくバ煙艸の粉
を吹入てもよし又皂莢末鼻孔内へ吹入て其ニ頭
髮を提げてひき起す可し其時嚏出るときハ之

るしあり奥州邊にあくち、よぼくと云木あり此木の葉を採て嗅バよく嚏出る其地方の人ハ此を用ゆ

右の薬ハ筆の管様乃竹六七寸許に切り其端をなにて削り薬末を抄て病人の鼻孔の中程へ吹込べし餘り奥へ吹入るときハ却て嚏出かぬるなり又紙を引裂紙撚を作り此端へ右の末を傳て鼻孔へよれ程に入るも亦よし

次に手の大指の爪にて病人の人中の穴をしか

と掐付爪あとの付程よしそはし人中の穴後に図あり考ふべし

又急に病人の両手両足を上より先の方までなでおろす可しむまつりと撫おろすをよしとす痰氣を散する一助なり○又火のよくおこりたる火盆の中へ醋一杯を傾入醋の氣を病人の鼻の中へ入る様にして嗅すべし良久して醒此法中風に限らず一切卒倒の閉証に用てよし

痰壅不省ハ熨薬

をもしとれ葱白細に切たるを

三合小麥麩三合（糠を用ゆもよし）鹽二合よく和匀貳包
にわけ炒熱して絹にても木綿にて包ミ病人
の臍のうへを熨べし

痰壅不省服藥 生姜汁を白湯に攪用ゆべし白礬（薬店にあり）加へ服さしめて最良○又方童便と生姜
汁を等分にしまぜ服しめてよし○又方竹瀝（淡竹の）
を長け一尺許に截二つに割火の上に架炙て截口
より汁出るそのなり其汁を茶碗様の物に承取
り用ゆ是を竹瀝といふ淡竹なれバ多く灌ぎの
とれハ呉竹にてもかへ用ゆ番し

まぜて良○又方香油に姜汁を沖攪用ゆ又よし
○又方天南星 木香（二味共に薬店にあり）剉く等分水に
煎じ用ゆべし○又方皂莢（薬店にあり圖説後に出）蘿蔔子等
分剉て煎じ服せバ痰を吐

口噤を開藥を灌法 凡人の牙齒おほくハ上齒と
下齒とひちがひたるにある者あり其ひちがひ
ひたるに新しき烟管の吹口（若新しき烟管なきときハ烟管の吹口の様なる物を用ゆ）
を插し込介保人の口ゟ薬をふく

こて其吹口の管よりふき込飲しむべし○又法
病人の鼻の孔へ竹の管をさし込此管筆のぢく様の物よ
しより薬を吹込べし○又法鼻をしっかして撮めば
息止りて口自らひらくものあり軽き症よハ此法よし

又法
介保人を以て口噤さる病人の口開かせ薬をのませんとするならバ介保人の左乃大指と中指とを以て病人の歯のそへとまわし不ね歯なく空なる所をしっかと按定バ歯自らひらく此時右の手にて薬を灌のませべし不飢人乃歯のちへとまりも不ハ両人の方ともよ歯一枚許あきて空所あり空

なる處へ大指と中指の爪を入てはよく按バ自ら開くものなり

又法
先病人を扶起し背後へまわり両手四本の指をのべ病人の顋をしっかと押へ人差指を下唇の承漿此處へあて押さげながら両手の大指にて病人の歯乃きハへ止りて空なる處を力を極て緊しくおすべし歯自ら開く病人の頭ハ後へ丸めて所よまうとしたる物或ハ介保人の胸か膝ぬ頭をあてうごかぬ様よして置べし

又開口噤揩歯方 白梅の肉を以て牙関を揩こと數遍すべし白礬を加よく和て擦付てよし○又方天南星の末五分龍脳（薬店にあり）少し入研和中指の頭へ蘸し噤たる歯を揩こと數次して口自ひらくものなり

又開口噤薫方 巴豆を研爛紙に包壓て油を其紙ようつし取て此紙にて撚を作り火を点て吹滅し其烟病人の鼻の中又ハ口中へ入薫て涎を多

出すべし（凡口ひらきて薬を灌のませらるゝバ病人の嚥より胸を摩おろすべし）

灸法 病人の咽中痰聲ありて鋸を曳ごとくなるハ湯も薬もおさまらざるものなり氣海関元に灸すべし多く灸するをよしとす○口噤て不開ハ聴會頬車に灸すべし又人中頬車百會承漿合谷翳風最よし○凡卒中涎塞不省ハ隠白百會人中絶骨章門風市氣海三里地倉大椎皆灸すべし（諸穴後に圖あり風市の穴ハ脚氣に出ス）○又何れにても臍中へ

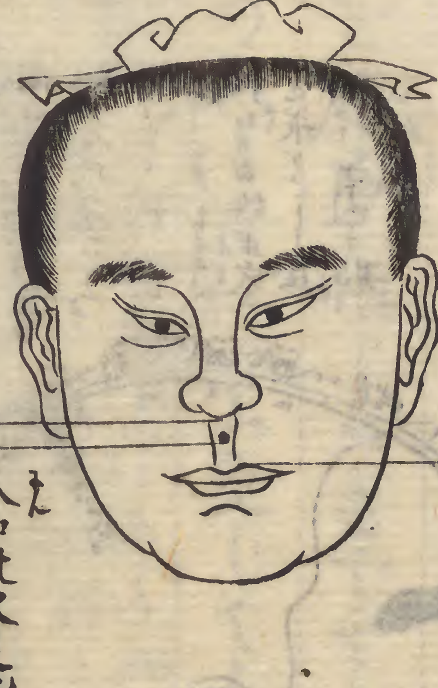
塩を填させるに灸させる事三百壮許なるべし或ハ炒たる塩を臍の中へ實しめ置させるに生姜一へぎ厚く片たるを置て灸させるもよし又山椒を臍内へ填しめ置てさせるに灸させるもよしいづれも百壮以上灸してよし

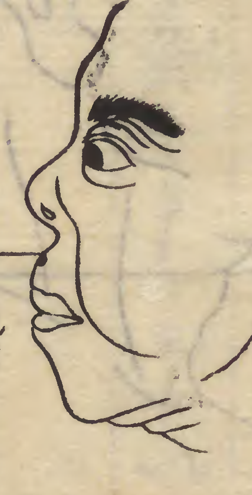
百會の穴ハ頭上にあり此穴を揆には先髪の際を定べし其法稲稈にて大椎より（大椎ハ頂乃脊骨の大なる骨なり）眉の心まで此間を量此稲稈を十八に折を尺八すと定此稲稈の端を眉心に當夫より後の方へまはし眉心より三寸を前の髪乃際として假点を付此点より五寸五分に

点をおろし是百會の穴也燃豆術の此穴を取には面を正直にしてとるべし（凹あり）項頸ハ屈伸ある処なれバ着うつむくと沢ハ項のびてすんもまさ修なる故正穴を求がたし且稲稈を肉に貼て取べし

眉心より前髪際迄三寸後髪際より大椎まで三寸也六寸に前後髪際乃間壹尺二寸あハせて一尺八寸なり

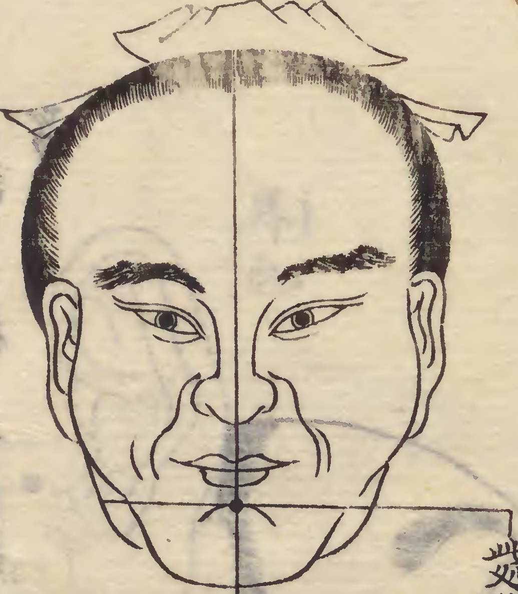
人中の穴ハ鼻の下に在鼻柱と唇乃尖る処との最中に点をすべし此ハ堅に溝のあり此中に付べきなり図と考合べし

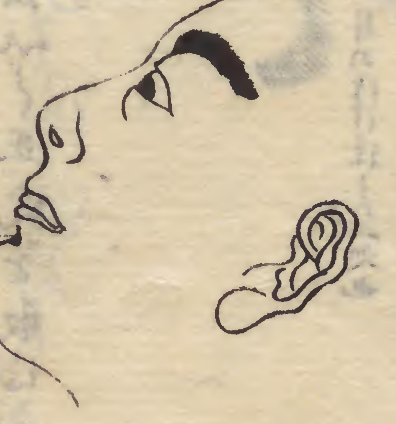




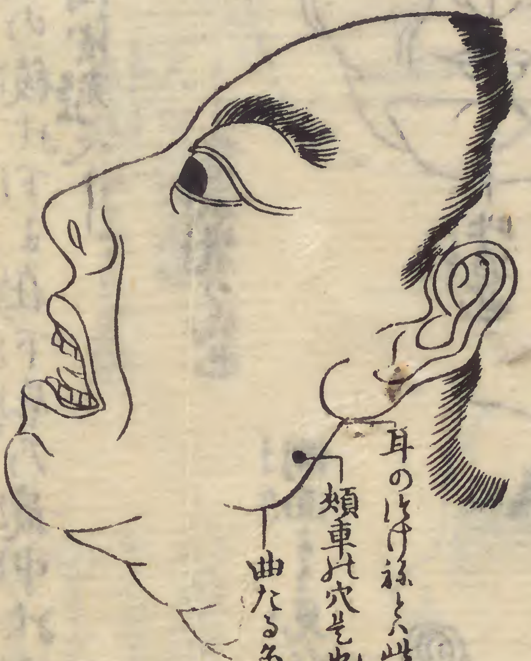
人中の穴人の質にて凸き人あり凹める人あり何れにても鼻柱と唇の尖との最中に点をすべし

承漿の穴ハ下唇の稜の下に在下唇乃最中の通おとがひの処是なり図を考合べし





頬車の穴ハ耳乃ほけ祢と云下曲たる骨の角の尖りとれ
最中にて二分許前の方へよせて点すべし是穴なり
口を閉ば此處に穴あり口を閉ハなし口を開て取べし
自試て自得すべし病人も其心を以て正穴を取る便き
なり



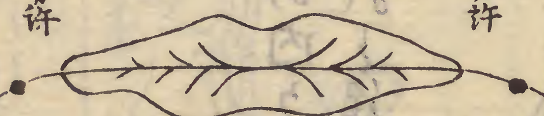
聴會の穴ハ耳前に在耳の前に高く起たる肉ありこれを
耳珠といふ此耳珠の下の陥たる処の前に指頭にて
按て口を開ば空ある処是なり図を考べし

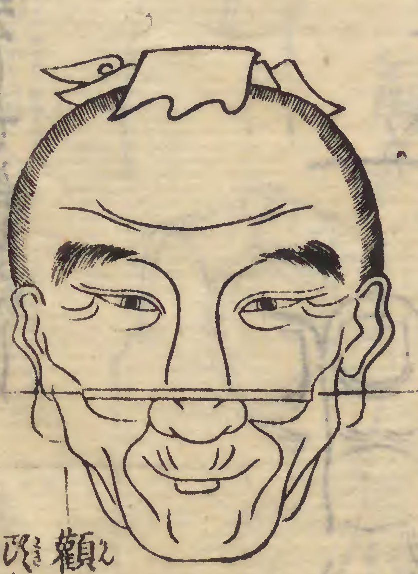
翳風

翳風の穴ハ耳の後ニ在耳朶ハ止の通り横ニ後の方髪ハを
へ際ニて耳の後ニ圓き骨ハ下廉の陥なる処是なり
指頭を以て按ば耳中ゑ引く痛是正穴なり

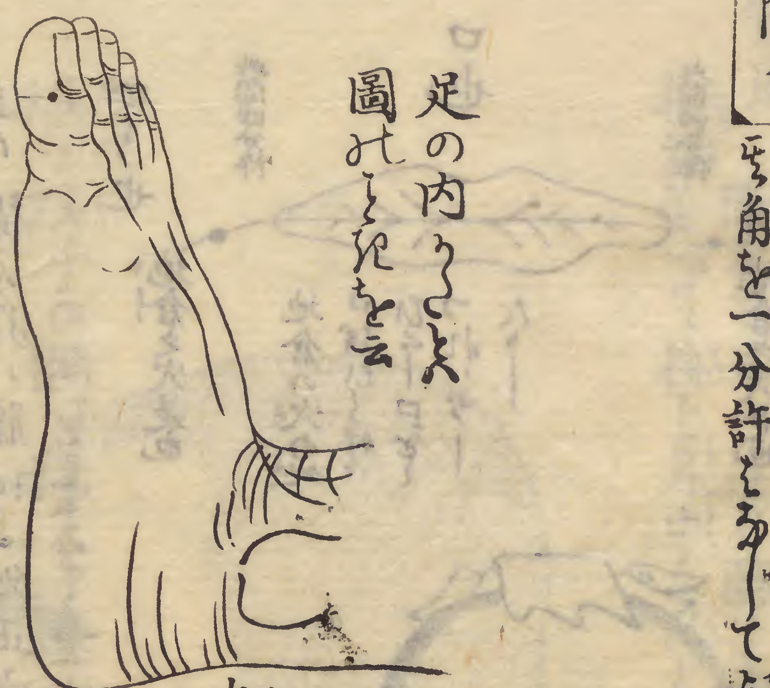
地倉

地倉の穴ハ口吻ハ傍ニ在此穴口吻を去こと四分許ニ点
すべし是穴なり扨また人差指と大指を以て内外
より撮みれバ脈ある処正穴なり寸法ハ面の両顴骨の
尖と尖との間を䕺みて量七ツニ折七寸と定たる内ハ
四分也

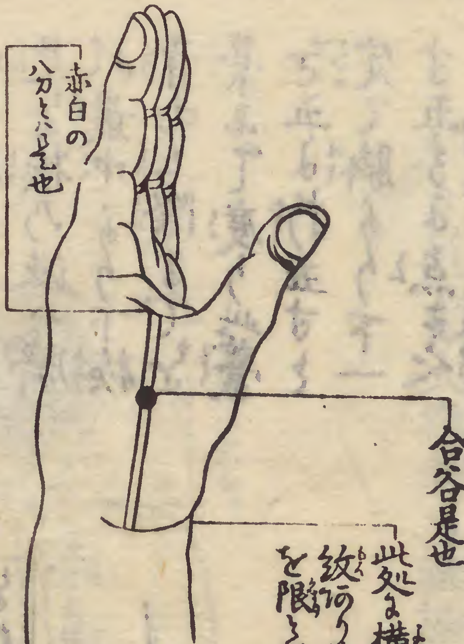


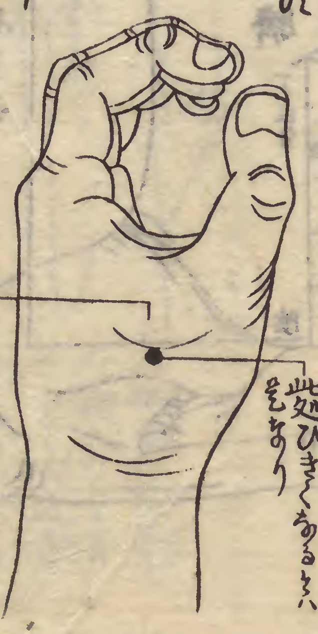


隠白の穴ハ足の大指の内乃方爪のはへぎハの角ニ在
其角を一分許をはなして点すべし



合谷の穴ハ手の大拇指と人差指との間岐ニ成たる骨の
中央ニ在此穴を取ニハ両指の岐より腕の横紋の処
まで竹葉にて量此ところを二ツニ折たる最中ニ点す是
穴なり

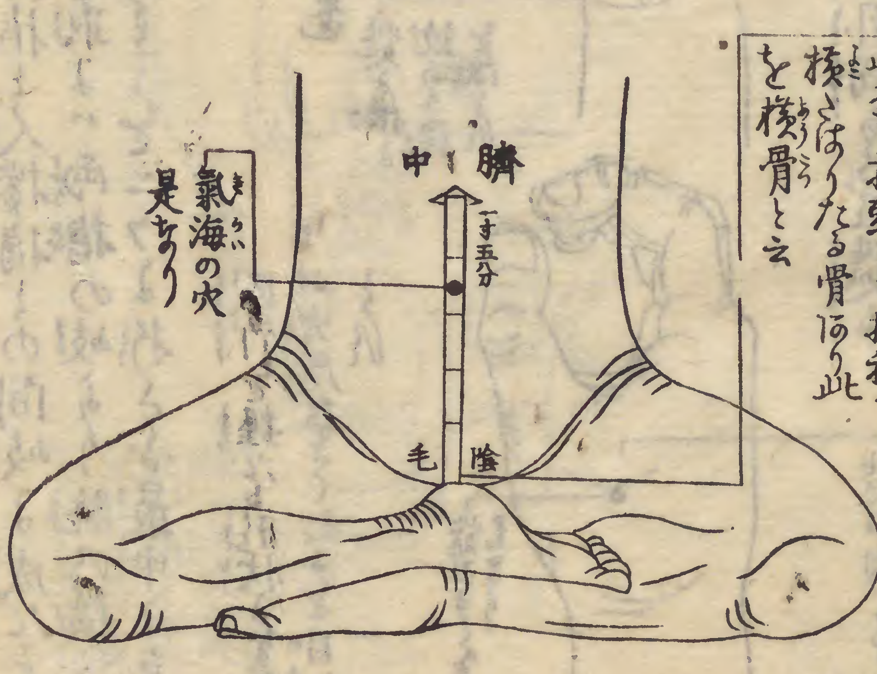




凡人の皮膚の色相内外同からず此処も
内外の際故赤と白とのかはりあり此より量べし

氣海

此穴臍の下に在。是を挨乃法ハ臍の最中より下横骨の上際までを藁にて度り此藁を五に折五寸と定て臍より下一寸五分に点をなし横骨とハ陰毛の中指頭にて按バ横たはりたる骨あり此骨の上際をいふなり



大椎

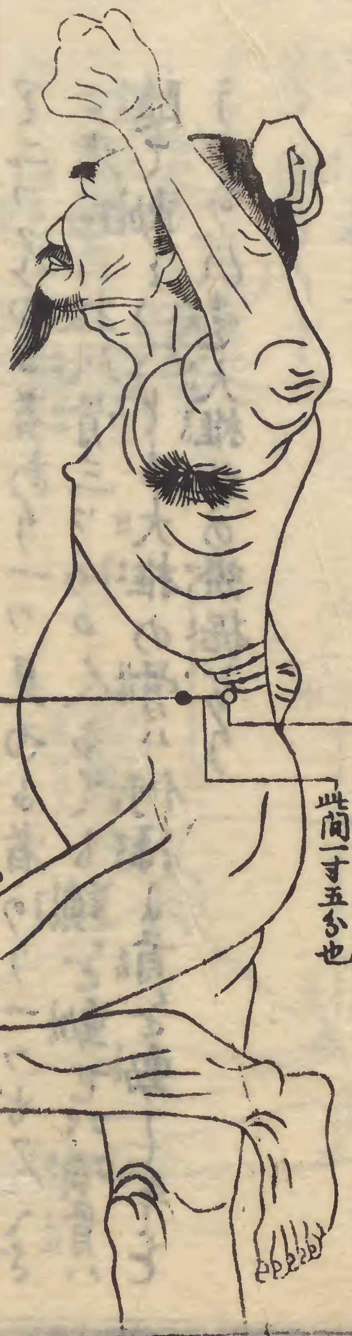
大椎の穴ハ脊乃第一上の脊骨の上に在。此穴を挨にハ此骨の上に小圓骨三ツ有を項骨と云三ツ有る者あり二ツ有る者あり一ツ見ゆる者あり一ツもみへざる者あり扨此骨三ツある人にても頭を動せバ項骨ハ随て動といへども大椎の骨ハ何様に首を動してもうごかず是大椎骨の證据なり

大椎骨ハ脊骨の最上のとまりにして下れ脊骨より大なりと謂べし

章門

章門ハ脇肋の季れ小肋骨の端に在此穴を揆にハ其人側臥しるまゝにして下にあんたる足を伸上にあんりし足を屈まバ肋骨あらわれて見易し扨肋骨れ季の小肋骨乃端に假りに点すべし此点より前の方へ一寸五分に点くし是章門の穴なり○分寸を定るにハ腰乃囲四尺貳寸にすゑて揆るべし寸法圖説天樞乃條にあり

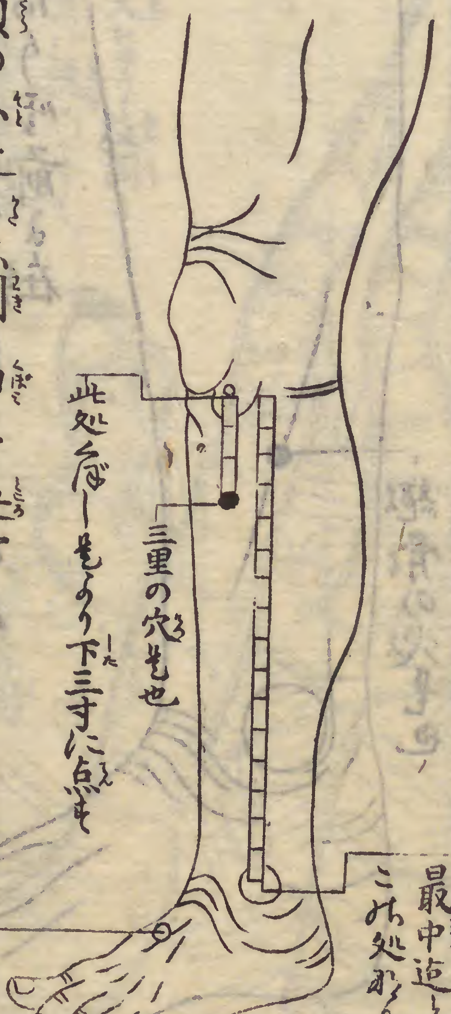
横に臥たる態如此



三里

此穴を揆にハ先膝の後膕乃横紋の頭より外踝乃尖の最上までを藁にて量此藁を十六に折ま尺六寸と定む

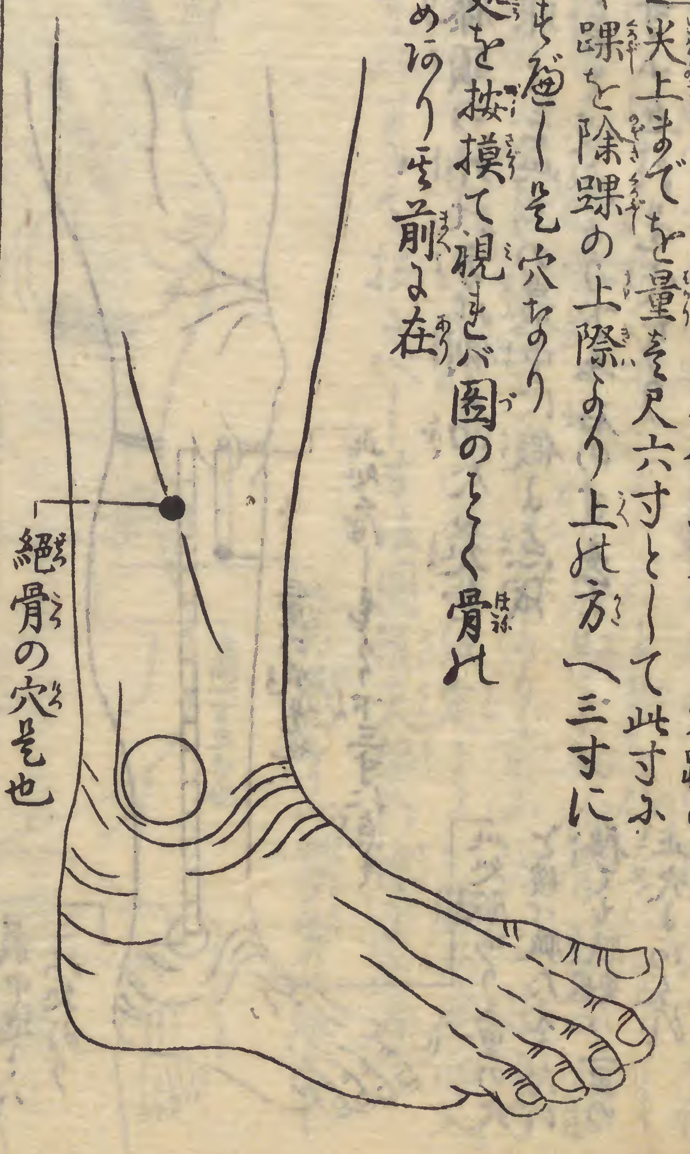
扨膝頭の外れ方れ側に凹たる処を膝眼と云此ふの最中に假に点を付また假点より下ゑ右のすみて三寸に点くし是穴なり



絶骨

此穴を取にハ膝膕横紋頭より外踝の尖上までを量を尺六寸として此寸にて踝を除踝の上際より上え方へ三寸に点を爲し是穴なり
此処を按摸て視れバ図のごとく骨れ解めたり是前に在

右灸穴濟生に志るせる人ハ常に取覺急卒の用に備置し以下諸穴皆志るせり



皂莢

和名さいかち
又さいかし

此樹極高大なり枝間に刺おほし葉ハ槐乃ごとく夏黄の花を開き実を結莢をなる状図のごとし莢を薬とも
又猪牙皂莢といふあり状猪の牙乃如くして小なり氣味最厚し此邦になし唐より渡る薬店にあり

脱證病状 凡人卒に倒れ奄忽人をしらず痰潮喘息眼口ゆがみ半身かなはずまた上前の閉證に比すれバ口開眼合手撒遺尿ある者を中風の脱證とする也

療法 後の脱陽の條に出す

脱陽 大ニ吐大ニ瀉さる後の陽脱を附ス

病状 卒に倒れ無性になり口を開手ゆびひろげ大便又ハ小便をもらし或ハ汗出て流るがごとく或ハ汗いでず惣身手足ともに温に目を合鼻息鹿鼾の如く或ハ痰咽にせりくとひへる音あり或ハ痰の音なく或ハ面赤又ハうは黒く又ハ顔色粧がごとし是脱陽也

○凡霍亂等にて吐瀉やまず又ハ夥しく吐瀉し

たる後元氣やゝもしく手足冷あがつてひや汗出
て陰嚢ちゞみ上り手足搐し面くろく息づかひ
せハしく或ハ手足乃筋引つまり漸々に無性に
成ル者あり皆陽脱の候なり
○或ハ常々喘息もちとて短氣つよく左の乳れ
下の動氣つよき人遽に脱陽なることおほし又
暴瀉後或ハ厠の内或ハ厠より出て卒に倒るゝ
あり是等皆脱陽なれバ療法皆同じ

療法 早速に神闕氣海關元に灸すること二三百壯
すべし大劑にして獨参湯を用ゆべし 人参弐匁 水中茶椀
に弐杯入一杯半に煎じ用ゆ 又膻中の穴に灸すべし及隱白百
會人中絶骨章門風市等の諸穴 六穴は中風に出ス 図説に灸
すべし痰強きハ参姜湯 人参壹匁生姜壹匁也 煎じ様ハ獨参湯同じ 四支
厥冷にハ参附湯 人参一銭 附子一銭 煎服汗多出バ人参黄
芪各をゝ煎服す或ハ芪附湯 附子黄芪各一匁 煎じ服す○
又方桂枝 薬店にあり買求べし をゝ両剉ゝ好酒にてせんじ

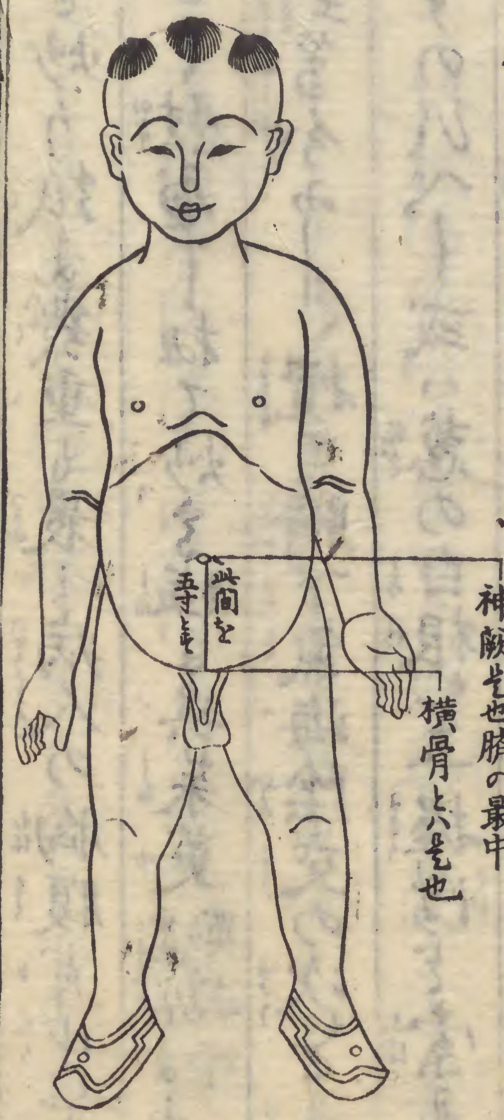
飲しむ可し若桂枝も無きときハ葱の白根を侭
廿本許を剉ミ好酒にて濃せんじ飲しめてよし
或ハ生姜を擦く一両を侭酒にて煎じ用ゆ又
効あり

吐瀉の後
脱陽の証嘔氣やまずして藥も受ざる者あ
り此証には半夏を及附子を及煎じ服すべし嘔
氣やみて後参附湯又汗おほきハ芪附湯の類を
用ゆべし且氣海天樞中脘より多く灸して其上よ

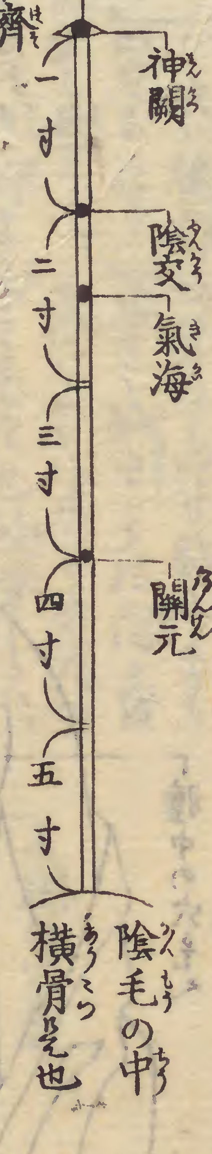
塩を炒り紙に幾重も裹ミ病人の胸腹背中を絶
間なく熨べし扨て炒る塩に呉茱萸（薬店にあり買求可し）
を剉ミ等分にして攪て臍下氣海陰交の次を是又
絶ずのすべし或ハ葱の白根を一握ほど索ミて
しかとくゝり根と葉とを切捨て其切口を烈火
にて燃し熱なる所を病人の臍下に着益き之を上
より火熨にて火を盛り熨すべし

神闕の穴ハ臍乃最中に在

氣海 陰交 關元の三穴ハ臍の下小腹の中行に在
是を挨の法ハ先寸を定べし其法
陰毛の中陰器の上に横にはりたる骨あり此
骨の上際より臍乃最中までを藁にて量取此
藁を五つに折く五寸と定此すにて臍の最中
より下へ一寸を陰交の穴とし亦一寸五分を
氣海の穴とし亦臍より三寸下を關元の穴と
す左に図するがごとし



藁にて度なる図也



膻中 此穴処ハ両の乳乃最中に在図のごとし
男子ハ知易し
女子ハ乳房大く垂て分別がたし図説ども後に載も考て挨て灸すべし

婦人の膻中も穴を揆には嗌乃結喉俗に云のどのの下胸の上乃最中に如此状の骨ありて此骨の上に凹処あり此処より下臍の最中までを藁にて量り此藁を十七に折是尺七寸として此寸を用て右嗌と胸との間凹ある処より下に六寸八分に点をすべし是膻中の穴なり

中脘

中脘の穴は臆前岐骨の下四寸臍上よりも四寸に在り岐骨と臍中との間を藁にて量り八つに折りて八寸と定たる寸法の中間に点をする是穴也岐骨とは臆の水おちの処

へ如此なる骨乃事なり

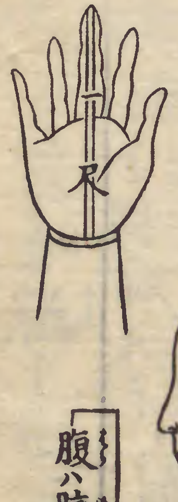
天樞

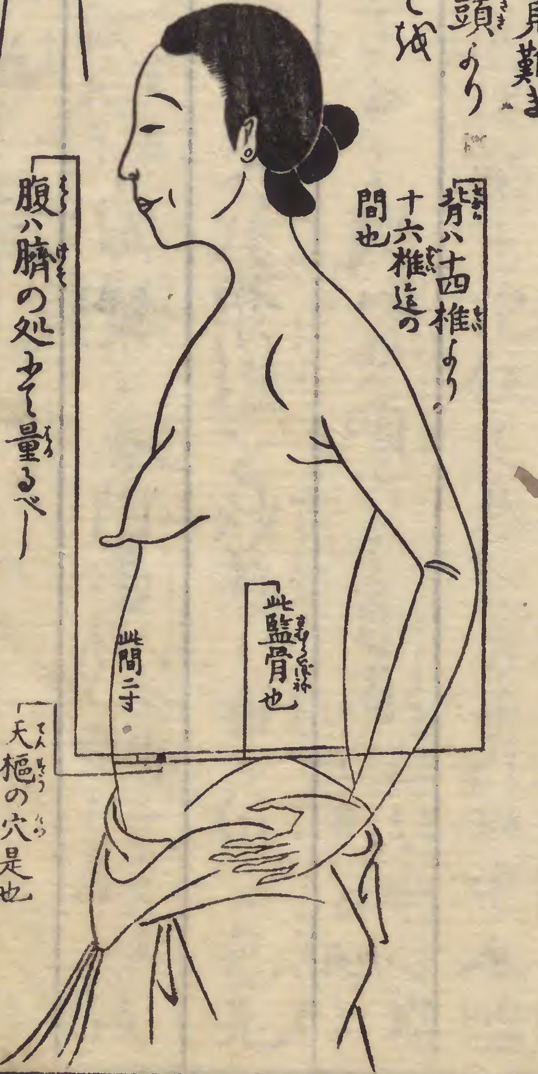
此穴ハ臍の両傍に在
此穴を取にハ先両乃乳の間を藁にて量り八に折て八寸と定め此寸を用て臍の両方へ開こと二寸ヅヽに点すべし

婦人ハ乳房大く垂て準となしがたし別に挨法ありて左に出せり

婦人の天樞の穴を挨にハ腰の圍にて取べし其法前ハ臍側ハ監骨のうへ背ハ十四椎より十六椎までの間にくくとく平直なる処にて縄をぐるりと引繞ひく剪断此縄を四尺弐寸と定此寸よく臍の最中より両方へ二寸ヅヽ開て点すべし是天樞の穴なり

若婦人腰を見難きとさハ中指の頭より腕の約紋まで此を一尺として此寸を用べし尤病人手にて量るべし





交接昏迷

男子交合の時氣絶し又走陽とて交合の時精をもらしやまずして消ぬ

病状 男子媾合過度婦人の身の上にて氣絶しのみことありて往々死する者あり

療法 婦人其侭緊く抱住て息を男子の口中へ嘘込てやめざる時ハ少頃して自省（若其婦人驚て身を開き手を放せバ必死す不可救）省後食塩を炒熱し布か紙に包先氣海（臍下一寸五分にあり）を熨し参附湯（人参附子各五銭水煎じ用）を煎じ灌ぎ服しむべし

走陽 久曠の男子又ハ縦慾なる人女子と交合し精泄出て止ざるなり救ざれバたちまち死を早く理法を施すべし

療法 其婦人緊と抱定て其陰茎を陰戸より出さしめず動かさしめず停めて婦人の息を男子の口中へ呵入てやめば且會陰（陰嚢と肛門との間の最中なり）を指にて緊と捻住て放さず少時すれば精自止るを以後亟よかを又童女に命て息を口中へ斷ず呵込せ秘て獨参湯（人参貳匁水を茶碗に二杯入一杯半に煎じ用ゆ）を灌のませてよし

○婦人氣を吹て男子の口中へ吹込にハ口をすぼめて吹ざ冷しき氣出てあしし口をすぼめずに吹込べし假令冬月寒氣にて節凍るとも氣吹うけてあたゝむるがごとく呵くと吹べし

○此法方をしらずして婦人驚愕て身を離さ手を放或ハ心ほくで療理かくれて死を遂る人あり凡人の妻妾にハ此法方あることを説話しらせてしらせ置べきことなり多慾なる人ハもつともいるまじきことなり○右交接昏迷と走陽の二證ハ倶に原脫陽に屬すれども然し理法不同故別に表章す

中氣

病状 卒に氣絶しなひ歯をくひしばり目をにらみ冷め且は身冷て咽に痰の聲なし
此証大抵中風の閉證と同じけれバ前に中風の下と合せみるべし然ども中風ハ身温也中氣ハ身冷し脉も又中風ハ浮也中氣ハ沈也
大抵此證の起るもとに心氣を労し又ハ大きに怒事あり或ハ怒をこらへ又ハ思案すること

ありて氣の鬱し時に發する證あり元皆七情此過極りたるに因て起る世に中氣中風を一ツに心會たる人多し初ハ大抵理法も似たる様なれども後に至りてハ大に同じからず

療法 先初に鼻に胡椒の末又ハ烟草の粉を吹込嚔をさせ後に酢を火盆に少し傾け入れて酢の氣をも病人に嗅せ且隱白 圖説中風にあり 湧泉 圖説霍乱にあり の次に灸してよし生姜の絞り汁を湯にて拌飲てよし〇又方木香 薬店にあり を急煎して飲しむべし〇又方香附子此末を及辰砂 薬店にあり 水飛ハ雑物あり 薬店にあり 砂利又ハ大々と云ものを新たに研細末として用をよしとし 五分白湯にて服すべし

痰厥

此條ハ中風痰壅の証と参へ考ふべし　理法も略同じ

病状 此病ハ中氣と同じ惟初に眩暈ありて卒倒き聲いてず咽に痰の聲ありて潮の湧がごとく咽にはまり歯をくひしめ目捗みつえ息麁し

此證と中風にハ痰の聲あり
中氣の證にハ痰乃聲なし

療法 先搐鼻藥（方ハ中風に見へたり）を用て嚏を取るべし　其次に塩湯に生姜のしぼり汁を入まて用ゆるよろし　竹瀝をかるもよろし（竹瀝取様中風に出す）又甘草一

味剉く濃煎じ多く飲しむべし痰を吐て愈なり
○又方半夏茯苓二味生薬店等分煎じ服す○又
方白礬薬店にあり末となし生姜の自然汁にて調へ
服すべし○又方大なる半夏薬店にあり十四粒皂莢
薬店にもあり図説中風に出ス一條剉て水二鍾入て一鍾に煎じ
生姜汁を入温め服すべし○又方香油一盞を喉
中へ灌入咽し須臾に痰涎を逐出して愈

中暑 暑に中り暍 餧ることあり

病状頭痛大熱して身を捫て見るに肌膚焼がごとく
大に渇き水を飲とし汗甚しく泄出て漸々に
無性になるに至るも喘満熱をいやこのるなり
凡暑気中と稱る病に二ツあり分なり人暑を避
として涼處に露坐又ハ夜臥失覆して陰寒を
うけ忽身の陽気暢越ことあたはずして病を得
るなり古の人是を中暑と云も謂大抵頭痛悪

寒肢節疼痛心煩汗出ることあり若此證なし
て吐瀉腹痛甚しけれバ即霍乱なり各療法同し
からず此條に記せず又ハ炎天を侵して往来し
又ハ農夫等日中に労役して天熱に中り気を
閉塞たるを救方を載たりおなじ中暑とハ
病因療法過に異なり混合すべからず暑を避んとし
ゐる八固り緩病なり故に此に載ず霍乱また
急證なりくらし別條に記しとあり
療法 凡天の炎熱に傷さるゝ人に冷気をあてて冷

水等をのましむればあたふまじ必ず死す炎
熱の毒外へ漏出る事ならざるゆへなり急日
陰の下へ臥しめ途中道傍ならば熱土塊を堀り取く
だき病人のむなさ又ハ臍の上に積ミ置き最中に
窩を作りて中へ他人をして多く小便をさせ
て熱気を透しむ可し　又衣類或ハ手拭等に
物を熱湯にひたし臍或ハ気海の邊を熨し追
追熱湯をもとに淋かけて漸く醒べし若湯な

れときハ道傍なる熱土を掬ひ臍の上に積重ね冷
れバ取換へく幾度も熨すべし○又方既に死と
見るハ新汲水少し鼻の孔へ入て扇にてあふく
但し至極重き病人なれば日にあたりたる地
を一尺あまりほりて其中へ水を入く攪し其水
を鼻の孔へ入但し少にても惟水をのりハ乃ま
しむべからず

服藥 大蒜一大瓣を嚼ミ水に送り下す若嚼こと
能はずんバ水にて研汁を灌ぎ飲しめてよし○
又方急に生姜一大塊を嚼爛かし冷水にて送下
べし○又方食蓼（食料にするものなり）茎葉共にをば煎て其
汁を灌飲しむべし○又方大蒜多少によらず
研碎道傍の熱土を取り一所に水に和て置
上にたまりたる水を灌飲しむべし○又方或ハ肚
痛忍がたく或ハ行人倒臥て道上にあるに藕を
搗汁を取灌下すべし

入井悶冒 井に入て悪き氣に中り昏みて倒るなり

春夏の際或ハ夏秋乃間窖中眢井の中皆陰毒の氣あり又山中深谷の間或ハ金銀銅坑の中往々震氣蒸騰す若人此氣に中るときハ悶絶する事ありて久く不省を救ハざれバ死まで

凡春夏ゝ秋の際窖中眢井久しく蓋仕込たる井戸ゝ入んとする時ハ燈火を入れるべし火消バ毒あり入べからず又鳥の毛をもて内に

投いれんるに直よ下へ落るハ毒氣なし若其毛旋舞て降らざるハ毒氣あり入べからず若入ねバならぬ事あらバ酒或ハ醋数升を井よても窖ゑても四邊の畔へそゝぎかけ少し停て入るべし又醋を熱く沸て右のごとく灑ぎ入るもよしとぞ

療法○若し毒氣に中らバ速よ其井中の水を汲てまづ面よ洒かけ且冷水を飲しめ亦頭及び惣身へ灌かけてよし○又方他の井の水を汲て惣身へ洒かけ置すれバしバらくして醒るなり○又法急よ病人の衣類を解裸体よして扶て濕氣ある地面の土間よ偃臥せしめ釅醋或ハ冷水を先面よ噴け濕氣ある草薦を厚く覆ひかけおくこと半時許ゐして甦るなり○又法先冷水を取て其面よ噀かけ次よ雄黄（薬店よあり上品なり用てもつともよし）鶏冠石ハ雄黄の末を一二匁冷水よ匀のませてよし此證轉筋め

其上腹痛甚しき者あり男子四人をと揃へ病人の
手足をとらへて捉住動ぬやうにして天樞と穴
図説中風の左右方をかりに灸し生姜をを両刲
にあり
酒にて濃く煎じ頓にのまさむべし又衣類にて
し綿絮にてし醋にてよく煮て熱くあてたると
きくにてと足にてし轉筋不を濕し裹み又濃き
塩湯に病人の手足をと浸し胸と脇との邊をと薫
洗てよし

食厥　食滯して卒に倒るゝなり

病状　卒に眩瘴して仆口噤て手足動かず或ハ
手足躁擾満悶し漸に昏冒して無性となる全
く中風に閉証のごとくされども口目ゆがむ
ることなく痰の聲なし扨腹を按してみるに心下を
りて下腹空輭よして右に天樞の邊或ハ中脘の
次に塊ありこれを按バ顔をと顰いたみある様子
に見えて兜角の胸の中に苦むていなり

凢中風中氣等の證にも心下痞満て邪物ある
證あり故に古方に多く吐方を用ひられり此證
も心下痞満ありて吐あれバあしからず皆閉證な
れバなり虚證にも又卒倒さる初に心下痞満
者あれども漸々に空軟になり空軟なるに随
ひてますます昏冒なる也閉證も痞満ハ吐ざる
内ハ軟ならざれバ物を吐きて後漸々に軟に成
空軟になるに随て稍々と氣もたしかに成

べし若此分別をなさずして妄に食厥として理法
を施さば其害甚しかるべし故に卒倒の病者
あらバ食前食後の時刻を考へ尚知得がたく
ハ傍人にも問求めて食後なれバ又ハ前
日にも大食せしことありや否や聞心下并に
中脘天樞二穴ともに（脱陽に出ス）の次をおしてみるに痞
滞塊積あらバ食厥と知るべし

療法 急に開噤法（中風の條に出ス）をなしてくちを

閉き濃せんじたる塩湯に生姜の絞汁を入ぬるま湯にして多くのませなばそれより鳥の毛又ハ紙撚にて咽を探り吐すべし○又方藍汁か糠味噌のうハ水をぬるま湯に沸して飲しむべし吐くことあり○吐て後紫蘇葉煎じ服すも生姜を入煎じ服すも亦可○又方藿香（薬店にあり）陳皮（蜜柑乃皮を服べし九年母の皮なりし二味薬店にもあり）等分煎服すも最よし

○此説最鍼刺をよしとす

驚怖卒死（ものにをどろきてめをまハしたるなり）

凡人夕暮又ハ夜中厠に登或ハ郊野へいで或ハ空冷屋室に遊び又ハ志づかなる所の地により忽異形の物をとりて口鼻の内へ邪悪の気を吸入驀然地に倒き手足厥冷両手を握り面色青黒或ハ口鼻より清血を流す事あり

凡卒に倒きて無性になし病人ハ聲をたてるを多く抱着なり惟小児の驚風並に大人の癲癇驚

怖して氣絶するときハ三焦は叫聲をあぐる也
是其の證據なり

療法 病人を外へ移し動すべからず不時に立て親戚衆人圍繞し火を焚き安息香麝香（薬店にあり）の類香ある薬を焼き人の覺むるを待て動かすべし先急に半夏の末を鼻孔中へ管にて吹込或ハ皂莢（猪牙皂莢よし 薬店にあり無きときハ常乃皂莢にてもよし 図説中風にあり）の末両鼻中に吹入るよし

服薬 雄黄（薬店にあり）を薑汁醇酒等に攪ぜ煎じ沸こと数度にして飲しむべし○又方麝香五分研て醋一合に和匀てのませてよし○又方韮汁を取りて口鼻へ灌入る○又方菖蒲（石菖の根之人家に多く栽るもの）を搗て汁を取りそゝき飲しむ○又方温酒を灌入てよし○又方醋少許を病人の鼻中へ吹入るゝもよく水分の穴（図霍乱にいだす）に灸する事七壮陰交の穴（図脱陽にあり）に灸する事三壮なるべし○又方辰

砂の末なり薬店に熊膽鑒定の法積氣暈倒に出す五分ばかり白湯に
解きまぜ用ゆ辰砂一味にてもよし

霍亂此病乾濕の二つあり濕霍亂ハ吐瀉して腹痛甚しきあり乾霍乱ハ吐もせず
瀉もせず惟心腹纏繞大に苦悶を云なり
何れも危急なる證にて種々の變化一條
に載がたし療法も亦變化あり
今十中の二三を記すのみ

濕霍亂病状　病發に頭痛弦瘇あるものあり又頭痛
弦瘇なく初より先吐して後に瀉者あり先瀉し
て後に吐するあり吐瀉の前より腹痛甚しきあ
り吐瀉ありて後に腹痛甚しきあり何れも腹中
疞痛まじるハなし稀に吐して吐至ずして瀉

至らずれバ或ハ吐瀉ともに至らず湯も薬も口に入らざれバ或ハ口乾て水を飲んとし或ハ悪寒甚しく或ハ熱を發し喘急しく手足共に厥冷戦掉軽きハ両脚轉筋重きハ惣身搐筋冷汗出唇舌動かバ漸々に昏倦なるなり

療法 忽然心腹疞痛て吐瀉せるハ先塩を炒熱し或ハ熱灰又ハ糠或ハ塩を炒紙に裹心腹并に臍下氣海脊柱十一椎十二椎の次と腰を熨べし

めてよし又ハ生姜を擦り汁を絞り去て滓を炒熱し紙に裹み右の所を熨すべし又ハ食蓼（食料よそ）（ることのなり）を多くあつき湯の中へ揉入て腰湯をせるもよしとぞ

服薬 胡椒十四五粒嚼て白湯にて飲み下れ又ハ石研て薬豆等分に加へ煎じ服す〇又方呉茱萸乾姜二味等分に煎じ服さしむ 二味共に薬店にあり 〇又方扁豆香薷 二味薬店にあり 各等分水に煎じ服すべし

嘔吐幷ニ乾嘔不已ハ半夏茱店にあり一味煎じ生姜の絞り汁を入服す前の呉茱萸乾姜の二味もよし且中脘に灸すべし（中脘の穴図説中風にあり　間使ニ穴図後にあり）亦灸するもよろし○又方小蒜（図巻下諸物入ニあり）煮て汁を服し臍中に七壮灸す○又方手足冷るハ生半夏一匁生附子一匁（二味茱店にあり）生姜三片水二杯にて一杯半に煎じ用ゆ○又方芥子搗て末となし糊にまぜ紙に攤臍中に貼べし　吐不已ハ巨

闕の穴に灸すべし　啘やまざるハ大陵の穴に灸すべし（二穴共に図下にあり）熨薬の方ハ前におなじ

下利不已ハ天樞幷ニ大都に灸すべし（二穴ともに図後にあり）吐下止ずして手足厥冷元気なく冷汗出て煩悶してその云ふかたなく無性にならんとするハ参附湯人参一匁附子一匁（等分煎じ服す）又姜附湯乾姜壹匁附子壹匁煎じ服す又ハ附子を煎じ塩一撮を入れ攪て服すべし○又方桂枝茱店にあり壹両剉て好酒に煎じ服す

○又方連鬚葱白七莖酒にて濃煎じ服する或ハ白凢薬店にあり一匁沸湯に拌用ゆ○氣海図説中の條に有に灸する事数十壮また熨薬ニて前法によるべし

吐利不已ハ建里の穴水分の穴承筋の穴承山乃穴に灸すべし四穴図後にあり○臍に透て痛ハ關元の穴に灸して宜し図中風の部に出ス服薬ハ前の姜附湯参附湯の類を用てよし

已死腹中猶有暖氣ハ臍中に塩を塡て其上に灸

すべし或ハ氣海の穴倶に数百壮又効なき時ハ先大椎中風に図ありに小灸し尚又承筋に灸すべし又灸穴あり下に図を

手足轉筋ハ塩を臍中に塡て其上に灸すべし○轉筋する所ハ王瓜後に図説ありの實を搗碎又ハ食蓼食料にするものなりを木綿に包み湯にひたして痛む所をむし又其をつけくゝひてよし○又方大蒜を研泥の様になして足のうらの土ふまずに貼付宜し○服薬ハ前に同じ湧泉の穴又ハ外踝の尖

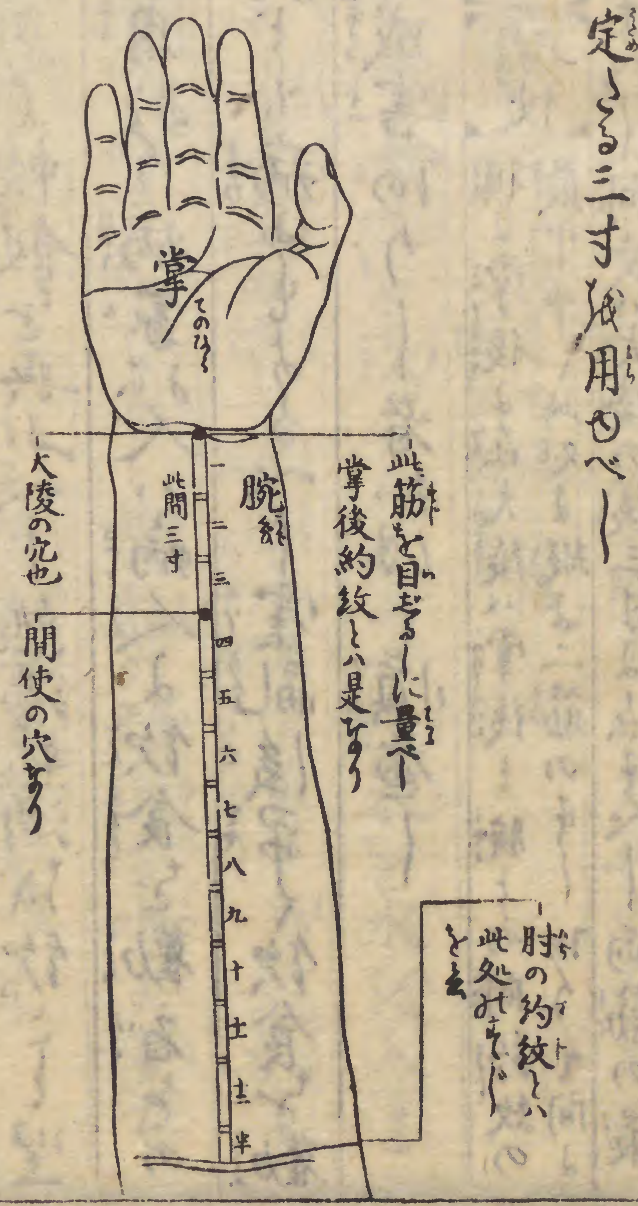
凡上七壮又ハ大指の爪甲際又ハ大指の本節乃上ニ灸すべし　何れも詳に後に図を出せり

吐下後渇　湯水を飲んとする八粳米を水に入れ研ぐ其汁を温め中へ竹瀝（竹瀝を取る法ハ中風にあり）と姜汁ちと入攪てのませてよし粟黍の類何も水に煮て汁を取服さしむべし又糯米泔温服すべし

吐瀉後　凡霍乱吐瀉ともに止る時早く粒食ニべからず假令稀粥と云ども一呷も咽に入れバ立どころに死ぬ吐瀉やみて半日許過て饑ゑし死とき粥清を飲しめ後に稀粥を少々与へ漸々てに消息て粳飯を与ふべし熱湯熱酒を飲こと堅く無用なり病家此人ハ病人に飲食を勧ることのなれども病ニもよるべし霍乱後早く飲食を勧て大成害になりし者おほし慎べし

大陵　**間使**　倶に掌後に在大陵ハ掌後と腕との間約紋の最中にし此処に縦に二筋のすじあり其間に点すべし間使ハ大陵の後三寸に点すべし両筋の最中に取べし扨此寸ハ直に大陵の次より時の約文までを

量り十二半に折てそを二寸五分と定むる三寸を用ひべし



外踝尖上の穴ハ外踝乃最中尖たる処に点してよし

足大趾爪甲際の穴ハ足乃大指ハ爪甲と肉との間に点すべし
肉とハ爪のきハの肉なり

足の大指の本節の穴ハ足乃大指のつけきハのふし也此処に太き筋あり此処に点すべし

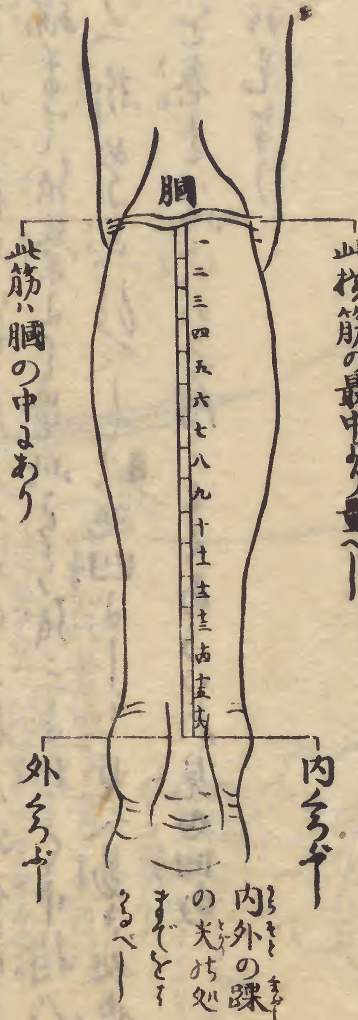
湧泉の穴ハ足心に在。此穴を取にハ足の大指乃次指の際より踵の端まで紙篭にて量。此紙を三に折く中指乃方上より一折めに点すべし。此処凹にして見へ易き処也。足の指を巻きバ此穴の処よくあらはれ見ゆ。凹の正中の所也なり

大都の穴ハ足乃大指の内の方拇のはけ様指を局きバ約紋を仰とみゆる。其約紋の止りに点すべし。此処骨と骨との間なり

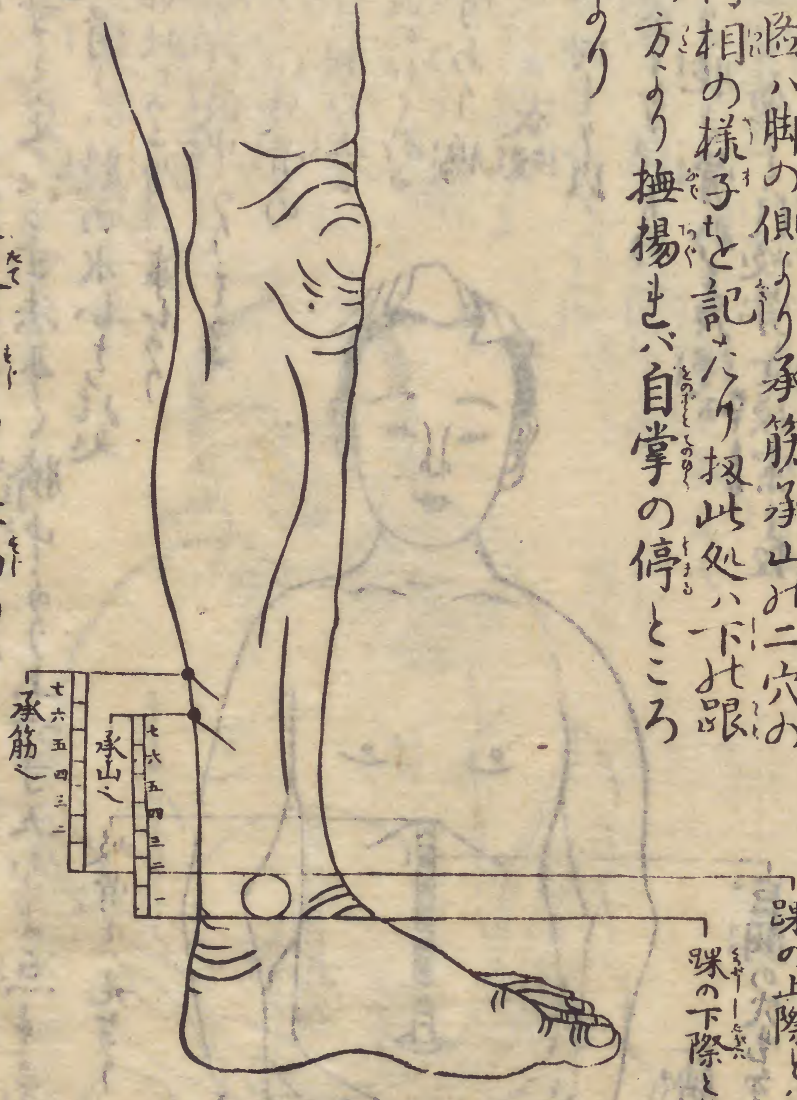
承筋　承山

承筋承山の穴ハ足の腨腸の中と半下とにあり此穴を取ニハ足を膕乃中ニ約紋あり此最中より内踝と外踝とれい尖の位まで以稲稈ニて量此ころを十六ニ折き尺六寸と定踝の下際より七寸上ニ當るハ承山なり踝れ上際より七寸上ニ當るハ承筋なり

此図ハ脚を後より見たる状なり



此図ハ脚の側より承筋承山の二穴の肉相の様子を記したり扨此処ハ下の跟の方より撫揚ぐれバ自掌の停ところなり



巨闕

の穴ハ臆前岐骨乃下一寸五分臍上より六寸五分の所ニ在り岐骨と臍中と此間を藁にて量り八ッに折りく八寸と定たる寸法にて臍中より上六寸五分に点をさし穴也

岐骨とハ臆の水おちの処へ如此なる骨の事なり此骨の最中のりをもるべし（）岐骨の間巨闕の上に〇此の如くなる小骨あり鳩尾と云長短人〻同しからず又全くなきものあり脆き骨なればかりに漫に重按ならず岐骨を摸索すれば心得あるべし

水分　建里

此二穴ハ臍の上に在前の巨闕を取如く岐骨と臍と此間を藁にて量り八ッに折八寸と定る寸を用ひ臍上一寸が水分の穴なり又臍上三寸を建里乃穴とす図とひきあはせ見べし

已に死するといへども腹中に猶煖氣ある者ハ左の處に灸すべし

其人を覆に臥しめ両の手を伸両の肘の尖と尖との間へ縄を引その縄の下に當たる脊骨の最中より両方へひらく其脊骨の両傍のきハへより付て二穴を点し灸數百壯すべし

王瓜

和名 玉づさ からすうり ちうちこぶ きうりのまくら

人家垣墻の間或ハ原野處々に在三月苗を生じ蔓に鬚多し葉の狀圖乃ごとくにして面の色深綠背ハ淡綠し濇て光澤なく毛あり六七月花を開き實を結ぶ狀上圓下尖て長し霜を経て熟して赤し殼中に子あり形ち蟷螂の頭のごとく又結びたるがごとし故に玉づさと云

乾霍亂病狀　忽然心下痞鞕腹肚滿疞痛堪がたく
漸〻に煩躁擾亂し吐んとして吐ず瀉せんとして
瀉さず手足逆冷冷汗出胸膈ごとく起りふさが
り須刻に命危き也

凡霍亂ハ腹中に宿食留飲等の邪物ある故へ
なれバ吐瀉すべき筈なるを乾霍亂ハ吐瀉せ
ざるに因て擾亂益劇なり吐も瀉もせざれども
遂に死に到る扨て此症ハ吐瀉せしむる薬を
用ゆべき事なれども邪物の所在を知らざ
れバ理法を誤て害少からず故に其大意を載
すり此症中脘に邪物閉塞てある故に吐瀉な
し其邪物上脘の方に多く聚たるあり又下
脘に多く聚るあり是を看る法ハ先手を
以て病人の腹を摸索り按そに中脘より上
の方格別に緊滿あるか又ハ堅き聚塊あり
て按ときハ痛甚しく手を近よせざるハ邪物

上のくとふあしとれ若中脘より下ゑあるに堅き塊ありて按せバ痛ミしくて手ち近づけざるハ邪物下ゑ方ふ多しとれ邪物の在るを見定めんとならバ先人の腹部に分界を弁知置し胸前脇骨の正中ふへ如此骨ありて岐骨といふ此骨と臍との最中を中脘とれ圖の如し

中脘ハ前の中風の條よ詳なり岐骨ハ此條の前巨闕の下に詳かなり

腹部分界圖

痛初乃時ハ塊物の形有無在所も見えざるものなり故に早く心を用てみるべし淺よハ腹肉一圓よ膨脹して塊物の在処知ざる者なり

扨右邪物の所在を能く見定る上ふて上に在バ吐方を用ひ下ふあらバ下剤を用ゆべし吐を發すれバ瀉も付瀉せバ吐も發することと

のあり又瀉して吐ざれ吐て瀉さゞるものあ
り別に療法あり右療法如是然るに若中脘以
下に邪物ある者に誤て駿烈の吐剤を用ゆれバ
徒に其氣をとり升撓く但乾嘔甚しく漸に
小肚腹膨脹水漿咽に下らず冷汗出悶亂して
死す中脘以上にある者を誤て下剤を施せバ
上逆之氣を壅遏ぐ故又悶亂し遂に元氣接
續ずして死す懼るべし此說危急なる事

風前の燭の如し病發に理を失へバ後に適當
の薬ありとも効なし

療法 先心下以上に悪心或ハ乾嘔などし心下に
邪物ありて按て痛むハ頭至極鹹き塩湯一茶鍾
を飲しめ指を咽に挿て或ハ紙撚又ハ鳥の羽を
咽に入れ探りて邪物を吐出してよし若夫にて
も吐ざるハ再び一杯を飲しめ前のごとく探り
吐せてよし〇又方濃塩湯の中へ童子の小便と

生姜の絞汁を加へて頓に服するもよし○又方
釅酢を微温めて飲咽を探り吐てのち炒鹽熱灰
を紙に裹胸腹を熨べし 前の食厥の條と参へ看るべし
心腹共に痛られを按バ心下中脘の邊共塊ある
ハ先塩湯ぬるくして飲て咽を探吐すべし吐て
後必大便も通べし若大便せざるハ檳榔子 薬店にあり
二匁童便茶甌に半分水茶甌に一杯入八分目に
煎て服さしむべし○脹満吐下せざるハ生紫蘇

を搗汁を取飲しむべし乾紫蘇ハ煮汁を飲し
むるもよし○臍中へ塩を填て多灸すべし
中脘以下小腹えかけ絞るが如痛あるを按ハ中
脘より下腹の方に塊物ある者ハ厚朴 薬店にあり を
生姜の汁を付炙研末となし白湯にて二匁許を
用ゆ或ハ厚朴剉炙煎姜汁を入拌用ゆ或ハ肉桂
枳實に二味 薬店にあり を等分 ○右の諸方を用て後檳
榔子童便少加へ水に煎じ用べし○痛強く死ん

んとするハ巴豆 薬店にあり 皮を去少く 火にいり研爛 唐大黄 乾姜 二味共に薬店にあり の末各一匁蜜にまぜ大豆許を三ツ四ツ程燒水にて用ゆべし暫して吐下ありて愈

疔毒昏憒 疔の毒にて氣を失なり 附 疔瘡 紅絲疔

病状 凡人平居無事にして暴に死る者あり何故なる事とも知れざるハ撚紙に火を點し死人の遍身をよく見るべし若小瘡あらバ是疔毒内に入るなりくはしく下に記せり 疔瘡の状委く 面部等の顯たる所に生ずるハ見易き故に知易し身體手脚乃隠るゝ所に生じたるハみえがたき故に往々に見誤る事あり又ハ初發に憎寒壯熱

ありて傷寒と會て療理し救はざるに至る者あり此證急に救はざれバ半日に死す死して後も屍に紫黒の点あるべし疔毒なり故に此證緩にすべからず

療法　先小瘡の上に灸すべし（疔瘡妄に灸すべからず然れども昏憒するものハ灸すべきを良とし）甦て後に雄黄（薬店にあり）一味末とし酒にて服すべし麝香（薬店にあり）少し許入る最よし○又方甘草（薬店にあり）に菉豆粉辰砂少（薬店にあり）各等分細末にして白湯にて二三匁づゝ用ゆべし

○又方蒼耳（図説下にあり）一握生姜三匁一ツに搗爛く泥のごとくし生頭酒一椀を入和匀て絞り渣を去て熱酒にて服し汗大に出るをよしとす○又方藊豆と野菊花（図説下にあり）を搗和て熱酒に入酔ほど飲べし疔瘡へハ蒼耳の根苗茎葉共に焼灰となし醋或ハ米泔或ハ靛（染家にある藍甕乃濃水なり）小調疔の上に塗べし毒根出て愈（此外塗藥ハ附録下の條と参べし）

疔瘡の状初發ハ僅ニ粟粒許の小瘡にして痛ミなし或ハ衣類又ハ何物にても物ニ觸て忽疼痛を發することあり或ハ惟微痒を覚るニ就て抓破とひとしく忽疼痛を發するあり然しなから三日常の小瘡ニ比すれバ四畔の焮核強し紫色を帯ひ邉麻ひ痛も常の小瘡と自異なり其上悪寒發熱四肢沈重心悸頭疼頭眩等の証あり此の種と其變態定りなし疔の生する所も亦定なし頭面耳鼻口目の邉并ニ手足骨節の間惣而肉薄き所ニ生ずるものなり急ニ理療せざれバ毒氣内攻して死ニ至るなり

療法 急ニ針にて疔の頭の処を刺し悪血を擠し出し又ハ人をして吮出さしむるなり疔の処ハ肉強く針しても痛ざるものあり　針ハ三稜針をよしとす　無ときハ物縫針にても針する跡へ後の傳薬并ニ服薬を用ゆべし然し針ハ手練なくてハ事を誤る

事あるものあらバ如何き丈ハ外科を邀く任まくべし○拳螺図説後ニありの厴を焼灰にして末となし酢ニ和ぐ疔の圍二三分四方を除ひけく四畔乃堆核ある処へ塗バ疔の頭より黄水出て愈若疔の頭まで塗バ毒を擁て大害あり○針を刺たる鍼孔の内へハ蝸牛図説後ニあり殻共ニ搗爛泥のごとくして貼敷てよし○又方園庭ニ栽たる菊花若花なき時ハ茎葉又ハ根ニても

搗絞汁を温酒ニ和て飲べし其渣を鍼孔乃邊ニ貼てよし○又方益母草図説下ニありの葉搗く塗べし○又方明礬薬店ニあり三匁葱白七本搗爛七塊ニ分一塊を服る毎ニ酒一杯ニて送下し衣被を厚く蓋ひ汗をとるべし若汗出ざるハ再葱白煎汁一鍾を服し少頃して汗出バ従容と蓋たる衣類を減すべし○又方豨薟草五葉草大薊三種共下ニ図あり大蒜和名にんにく分擂爛て熱酒一椀を入

絞て汁を取り服せ汗出て効あり豨薟一味熱
酒に調服亦よし〇又方蕺菜圖説下にあり搗爛付
てよし痛甚に最よし付る當分甚痛とも取去
爲らば〇又方蒲公英圖説下にありの白汁を取多
塗てよし此外前の疔毒昏憒の服薬互に用てよし

紅絲疔 疔瘡脚に生ずるハ必紅絲を引て臍に至
る手に生ずるハ紅絲を引て胸に至り唇面口内
に生ずるハ紅絲を引て喉に入る臍に至り心に

至り喉に至る者ハ嘔逆迷悶になりて死を致に
速に療法を用ゆべし

療法 凡手足面部等に黄泡或ハ紫黒色の泡を生
じ夫より紅線一條引上らバ其線至り盡処より
三分ほどのこし紅線の上深二三分ほど鍼を以
て刺線の兩方より指頭にて悪血を擠出すべし
其跡へ前の疔瘡乃傳薬を塗てよし服薬ハ此方
と前方を用べし

凡疔瘡は限らず手指の小瘡疥瘡の類ふとしと生じたる時手を振て歩行すれバ小き腫物よりして紅絲を引て上ることあり疔瘡よかぎらずとも右乃法を以て針して悪血を出すべし

蒼耳

和名をなもミ

此草春初て苗を生じ夏よ至て高さ四五尺許よ成る

七八月のころ葉の間の枝ふ叉を生じ梢よ実を結ぶ其實桑椹よ似て小さけれバ短小して刺あり人の衣類よ粘てとれざるものなり

豨薟

和名めなもミ地方よりてもとかもミと云

此草春の初よ苗を生じ夏ふ至て高さ四五尺ニ至る

葉相對し其状ハ蒼耳ノ類ニて椏牙深して薄軟なり秋ニ至て葉の間より枝を生じ花攢簇して黄色なり

五葉草

和名 やぶからし
きじむしろ
金ぶくろし
びんばうづる
ひさごづる

春の初苗を生じ夏に至り蔓延て原野或人家籬援乃間に多し藤ハ柔にて紫赤色に直稜あり葉ハ疎歯ありて五葉づゝ茎端よあり七八月淡黄花簇り開大さ粟

粒のごとし四出あり秋の末實を結ぶ生ハ青く熟すれバ紫黒色なり根ハ白く大さ指乃ごとくなるあり

益母

和名 めはじき
俗に にらよもぎと云

春の初苗を生じ夏に入て高さ三四尺其葉艾に似く葉の背青し茎を方にして稜あり

此図ハ夏乃初の状なり

此図ハ春初苗を生じたる状なり

此草茎に一寸許間ありて節あり節に相對して葉を生ぜ四五月の頃毎節に穂を生じ紅色の花を生ず

蕺菜

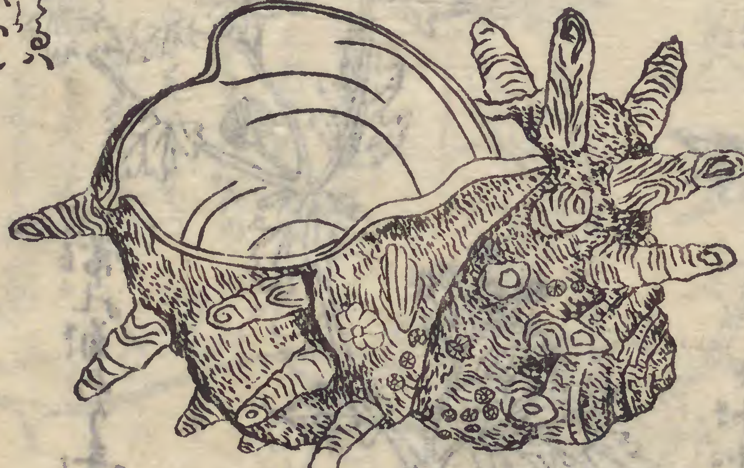
和名どくだミ　十薬　ぢごくそば
入道ぐさ　ぼうずぐさ

山陰山谷溼地に在
春苗を生ず茎
赤紫にて葉の
形蕎麦乃
葉に似て
厚く面
青く背紫なり茎葉ともに
甚臭氣あり多く陰地に生て蘩茂するものなり

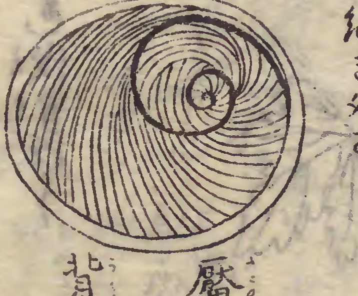
拳螺

和名さゞゐ
又さゞい

状辛螺に似て圓り
殻青白にて尾盤起り
殻に尖る角数本
あり靨ハ亦甚厚く
堅くして圓かり高
く起て凹に其肌ハ鮫
皮のごとく色白し
亦旋紋あり肉ハ一
端ハ黒く一端ハ黄
諸州四國九州海中に産するハ
状まるくして角なし鰲
然とも功用ハおなじ用ゆべし



又靨に毛ある物
あり彼列ハ
めくらいしと云
三品用処之
靨の状如是薬に



野菊花

和名 のぎく

状形芬芳全く菊に等し惟花葉共に小細なり秋の末に花を開く赤菊に似て小なり心も瓣も皆黄色なり處々野邊に生ず

○雞腸児花も又和に野菊と呼花乃色淡紫に碧花なし絶て菊の氣なし

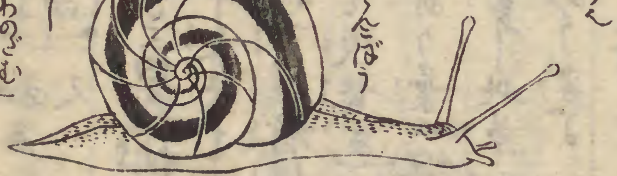
常の菊より葉の色浅青なり

此外野菊と称するもの二三品あり皆菊の香なし名に依て採誤るべからず

蝸牛

和名 かたつぶり

竹林池沼の岸に生ず雨の後最多し大小あり大なるを用べし殻あるハかたつぶり殻なきハなめくじり かたつぶりなめくじり八代用てよし 又和名 でんぼう てうし くむし あいく わのごむし たなり



蒲公英

和名 ちちな たんぽぽ ちちか きちか ちくな

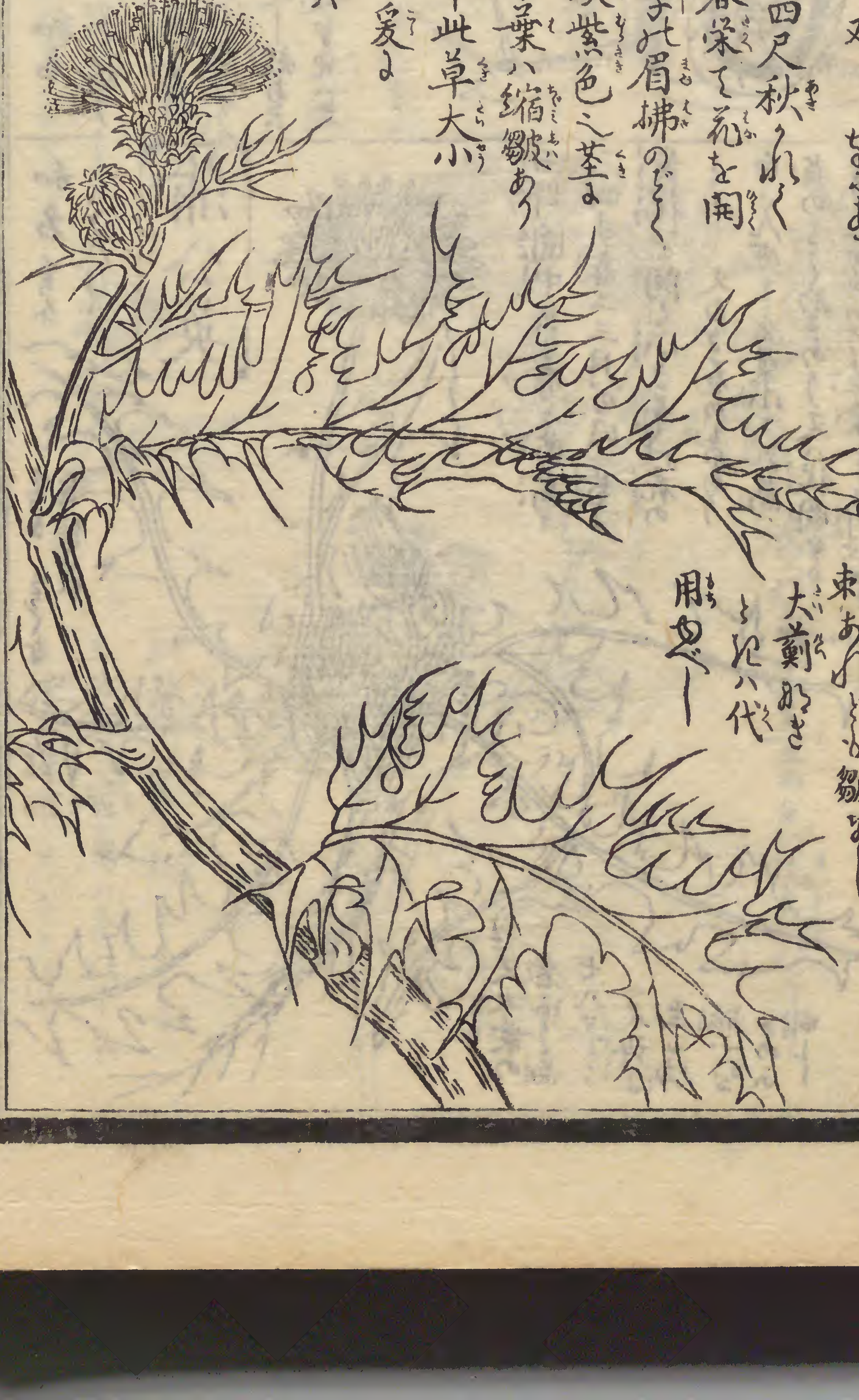
田野園中共に有り苗高さ三四寸春二三月の比一茎に黄花を開く小さき菊に似る花のごとし 又白き花のものあり白たんぽぽと云葉小さく状萵苣のごとくなるあり又ハ茎葉とも折バ白き汁出菜と成して食もの是なり

又大葉の者あり高さ七八寸より一尺許に至る功能小なることハ同じ

大薊

和名 やまあざみ
又 をにあざみ

苗高さ三四尺秋ハれく冬生じ春栄て花を開花の状女子の眉拂のごとくにして淡紫色也茎に五稜あり葉ハ縮皺ありて刺多し此草大小二種あり爰に用ゆる処ハ大なる者なり



其小なるハ高さ尺餘にして葉に刺あれども皺なし大薊なきときハ代用ゆべし

脚氣衝心

脚氣足より腹に入りむなもとへつき上るなり

病状 凡此證最初に脚膝弱或ハ頑麻或ハ瘻痛或ハ轉筋拘急或ハ踵跟足心等隠々痛或ハ脛脚に胕腫ある等の証ありて或ハ小腹麻痺卒に嘔吐を發し上衝強く肩にて息をなし喘息して白汗出乍寒乍熱煩悶甚しく或ハ精神漸に恍惚となり或ハ譫語を發し遂に無性となるを脚家の衝心にて九死一生なり急に理法を施すべし

又は初憎寒壯熱いそ全く傷寒のごとくなる有
見誤るべからず
衝心の節に至りて病發に右の如く脚に疾ある事を知ざれば理療に違ひあり病人も心付ば別のことゝ思ひ告語らずば事は誤ることあり
よくよく心得用ひて向べし

療法 檳榔子（薬店にあり）末にして二匁童子は小便に
く用ゆべし生姜汁を加ふるも亦よし○又方呉茱

萸一匁木瓜一匁（唐木瓜を用ゆべし味酔きものよし二味共薬店にあり）水にて煎じ服すべし犀角（薬店にあり）屑（鎊又ハ鮫の皮にておろすべし）五六分右煎薬の内へ入攪飲最よし○又方半夏（薬店にあり）二匁水煎じ生姜汁多く入服すべし○又方黒豆一合水三合を一合五勺に煎じて飲べし○甘草を加へ煎て服する最よし○又方鐵粉（刀鍛冶の削くづ釘の錆くづ何も用ゆべし錆たるものをよしとす）六七分水茶碗二杯入一杯に煎じ飲べし○又方鹿角（地方にありて）

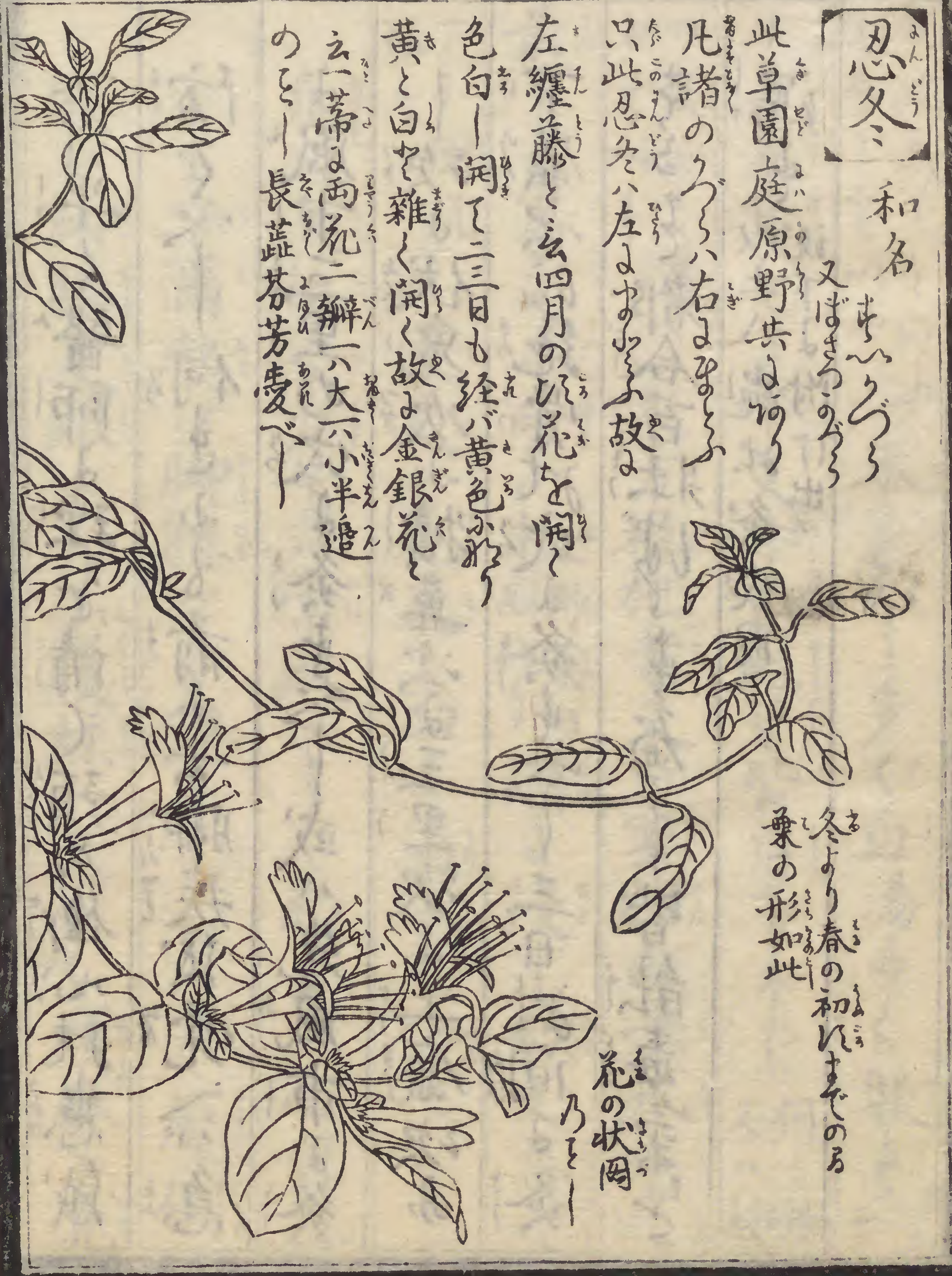
かはちゝとりに末となし多く白湯にて服すべし
又きゝを以ふし象牙とよし又牛角鯨牙皆用てよし 何も鑢又ハ鮫
の皮にて屑○又方枇杷葉又ハ蜜柑の葉水にて
よきんべし煎じ用也又牛旁の根野菜の品なり酒に浸し飲又忍冬
なり下に図説此葉或ハ花末となし酒にて飲べし
凡人大抵気力弱ハ常のごとく成れバ心付ね
ども卒爾起バ脚膝がくつきてよろく蹶倒
或ハ脚膝足跟より小腹杯へかけて頑麻を覚

へバ早く醫師に理を請て預め衝心の患を
防ぐべし何もなくも前に云脚疾を覚へバ急
に風市三里の穴に灸すべし或ハ先風市に灸
し次に伏兎次に犢鼻次に三里次に上廉次に
下廉次に絶骨の穴に灸すべし三日の間に灸
するを都合百壮ばかり灸し皆能毒気を
瀉す 以上八処の灸穴図説下に附け出す

忍冬

和名　すいかづら　又ばうこのかづら

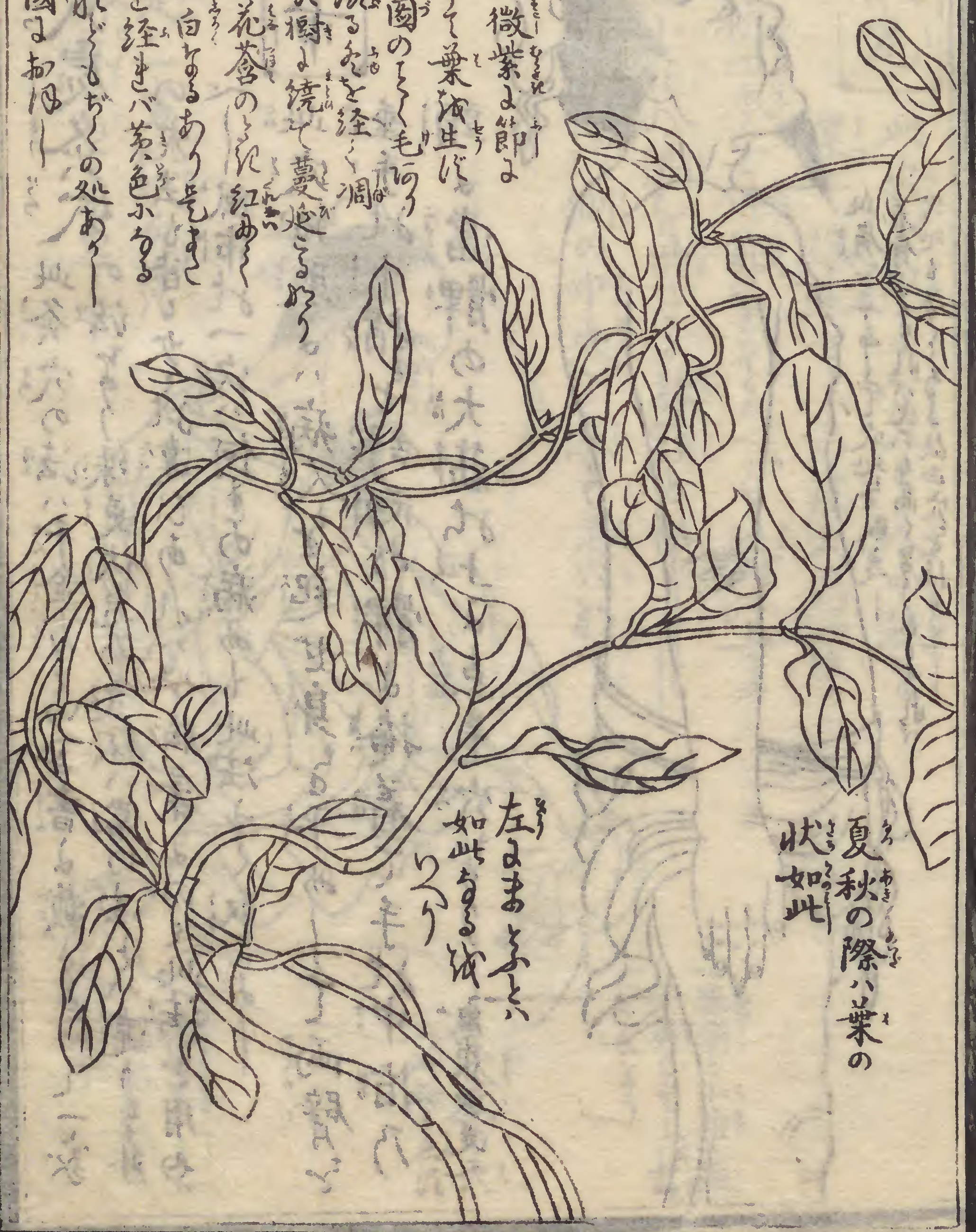
此草園庭原野共にあり凡諸のかづらハ右にまとふ只此忍冬ハ左にまとふ故に左纏藤と云四月の比花を開く色白し開て二三日も経バ黄色になり黄と白と雑く開く故に金銀花と云一蔕に両花二瓣一ハ大一ハ小半邉のごとし長蘂芬芳愛べし



冬より春の初れまでの葉の形如此

花の状図のごとし

茎ハ微紫に節に對して葉を生じ葉ハ図のごとく毛ありて渋るを経て凋まず樹に繞て蔓延るなり一種花蕊のはし紅にして開ハ白なるあり是まて日を経れバ黄色になるされどもちかくの処あり西國に多し



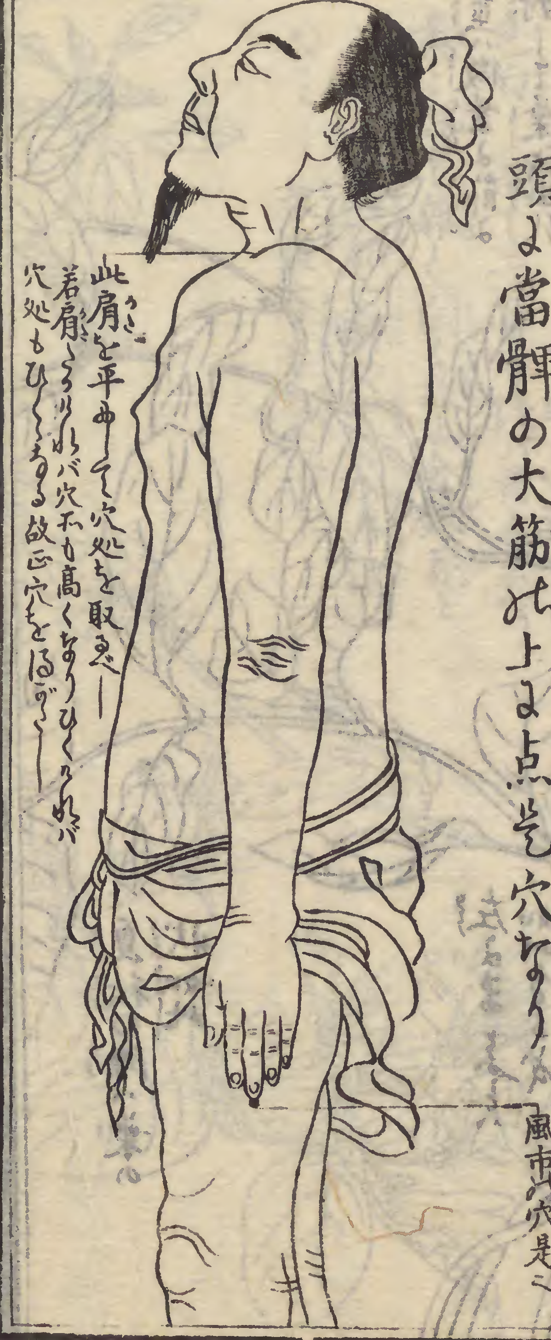
夏秋の際ハ葉の状如此

左にまとふとハ如此なる形なり

風市

八處灸穴 此灸穴の法ハ千金方といへる書に載られて一家の法なり殊更伏兎乃穴抔ハ常の法とハ違りて外の穴法も皆こゝれ違ひあれバ必脚氣にのミ此法を用ゆべし風市れ一穴ハ何れの病にも此法にて取てよし

此穴を取にハ病人を起せ身を平かにして両臂を垂手れ十指を舒両の髀に掩着て手れ中指乃頭に當髀の大筋れ上に点せし穴なり



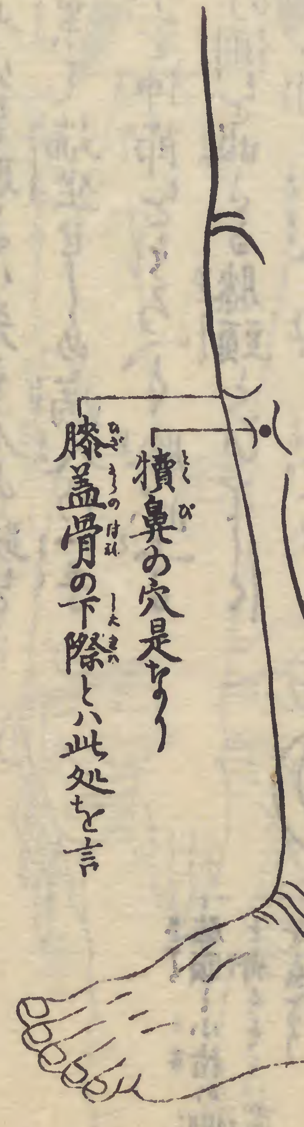
伏兎

此穴を取にハ先病人の趺を累て端坐せしめ病人乃一手の指四本を伸節をそろへて膝れ上に置小指の側を曲る膝頭とひとしく上の人指の側の中央に点せ是穴なり

是ハ一家れ伏兎にて脚氣にのミ用ゆべし

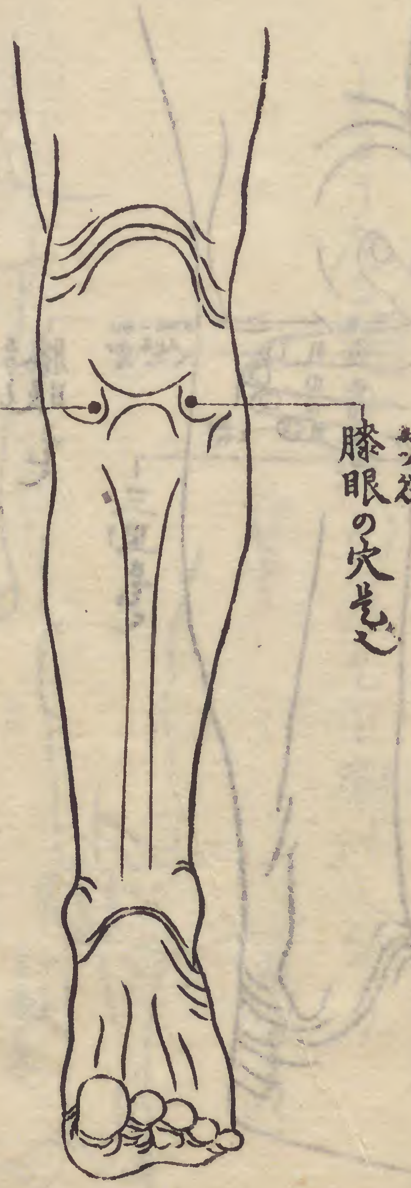
犢鼻

の穴ハ膝頭の外側に在膝盖骨の下際乃通の外側に見ゆる所ハ平なる様なく指頭にて按視れバ両傍骨よく侠解たる様なる形ハ如是処の最中に点すべし



膝眼

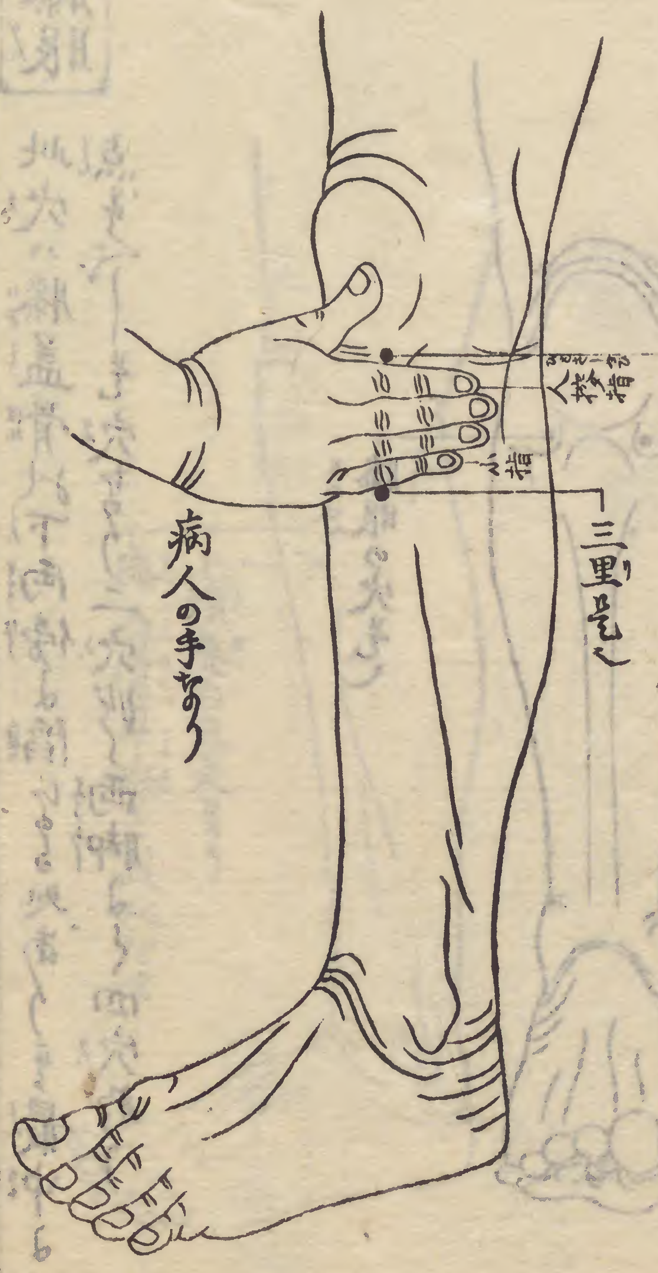
此穴ハ膝盖骨の下両傍に陥なる処あり其最中に点すべし是穴なり二穴づゝ両脚にて四穴なり



国立公文書館 National Archives of Japan

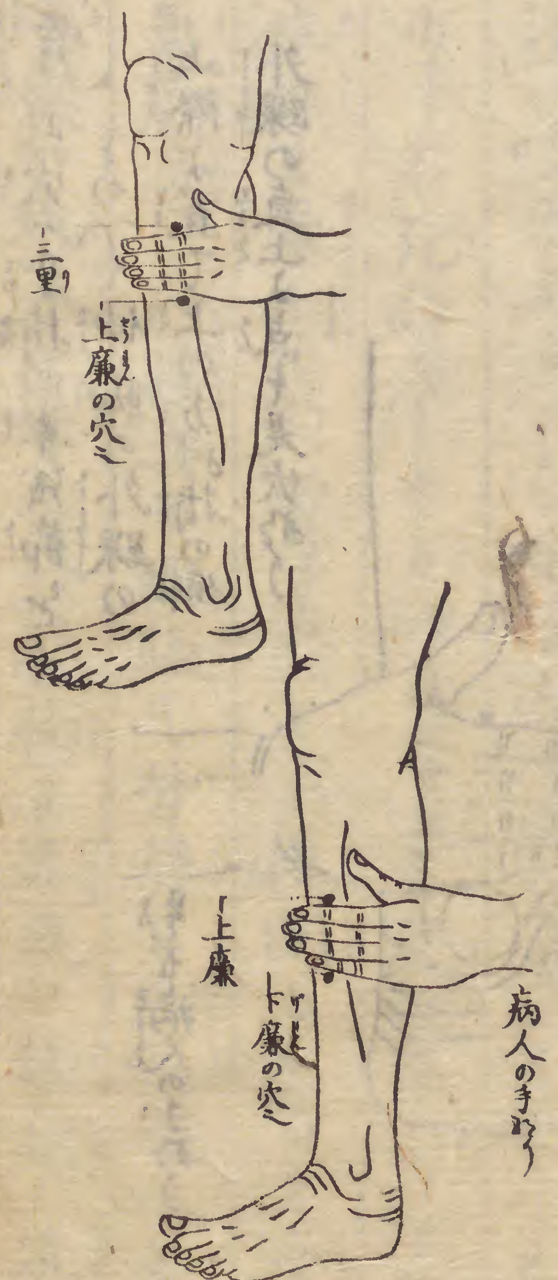
三里

此穴ハ手指四本を節をそろへて伸膝頭乃骨の下際外の方の膝眼の穴より下へ置て下にあたりたる小指きハ傍に点すべし是穴なり



上廉　下廉

の二穴ハ三里の下にあり揆法ハ手の指四本を伸く三里の穴より下の方にならべ掩く下にあたりたる指乃傍に点すべし是上廉の穴なり又上廉の穴より下の方へ又四本の指をならべ布て下にあたりたる指の傍へ点ス是下廉の穴なり



絶骨

此穴ハ手指四本の節をそろへて伸脚の外踝の上際ニ置て上の方なる指の側外踝の直上ニ点る是穴なり

積氣暈倒しやくおこりてめまひまはる疝氣衝逆冷氣入囊を附も

病状 此證初發ニ頭痛身熱或ハ憎寒後ニ大ニ熱を發し小腹痛ミ作て胸と脇肋ニ引疼甚し或ハ咬牙ふるへ〳〵反張冷汗出て流るゝがごとくおし〳〵死なんとするものあり又咬牙反張はげしく卒然ニ暈倒ものあり或ハ大小便閉るものあり又積氣厥逆て心腹共ニ膨脹て背膂ニ引痛嘔吐乾嘔或ハ痰沫を吐き或ハ心胸ニ湊或ハ脇肋へ筑

て腹中刺がごとく痛或ハ遂に厥逆あがり死せん
とするものあり
療法 木香薬店にあり末となし熱酒にて調服す○
又方赤小豆煮汁多く服す○又方香附子薬店にあり
末となし白湯にて服す或ハ縮砂の末甘草二品共に
薬店にあり末少し加へ服す○又方紫蘇の葉を水
にて煎じ服す急なる時ハ熱湯にて擺出し
用ゆ木香末少許を入て良○又方熊膽少許温

水にてときて灌のましむべし 熊膽偽物多き試法なり白盞中に浄水
を汲熊膽胡麻粒大ほど投入るゝに飛旋て迅疾
もの真なり遅きものハ偽物なり又堅炭にて火を燃
熾をこし其上に罌粟粒許を載て見るべし火乃
上にて湧上り漸しに炭の内へ滲込て跡なく硫
黄の香をはなつものハ真なり湧揚泡立るものハにごく
灰となり唯焦臭きハ偽物なり又少許を舌に上
へ置に苦き味舌の心へ透るものハ真なり苦味唇
止るハ偽物なり大抵是等にて辨知るべし
○又方半夏一味煎じ服さしめてよし乾嘔ある
に最よし○衝逆むかふに成しハ火盆に酢を
灌入て其氣を嗅しむべし○又方辰砂薬店にあり

二三分水にて用べし或ハ熊膽をとかし汁にて用ゆるも最よし〇

疝氣衝逆 素より陰嚢腫痛事有ヵ又腰少腹など拘急したる此證にあり又死もなくして忽然起る者あり其證少腹より胸膈まで衝上引疼て前の積氣と同説なれハ見合べし

療法 韮を擣て汁を取て飲〇又方檳榔子 薬店にあり 末にして温なる酒にて服す〇又方唐木瓜 薬店にあり の末酒にて服す〇又方呉茱萸 薬店にあり の末を温酒にて服す〇又方小蘹香杏仁 二味薬店にあり 末にし葱白少し入温酒にて服す〇又方甘草末白湯にて服す〇又方衝逆強く痰喘に塞ハ香附子を末 薬店にあり 浮石ハ海より出る者也ハし山より出る焼石なり薬に入るにハ薬店にあり ありて嘗てみるに鹽の末等分にして白湯にて生けある者試用也薑の絞り汁を拌て服す〇又方衝心あしく迎あるに杉乃木の節をよく煎じ用也小木ハよろしからず

迄一尺まり程より以上のものよし若節なく
バ根に近き所の木の中心の赤きを用べし

冷氣入囊て痛強く陰囊縮入く腹急痛絶入と
するものあり怠しぬハ死に至るなり

療法山椒を木綿の袋に入て陰囊を包むべし
○又方葱の白根を刻て炒り熱き所を木綿切に
包み陰囊を蒸すべし乳香薬店にありの末加る最
よし又茴香薬店にありを炒て用るもよし又

方白花山茶實和に椿の字用ゐるもあり或ハ生にて嚼食ひ
又ハ干きたるハ煎じ服てよし○又方地膚子
草箒になるものゝ實なり炒て末となし酒にて服ゆべし
此外服薬方ハ前の疝氣衝逆乃方と同し參考へ用ゆべし

癲癇卒倒

てんかんハ病にく俄にたおるゝ

病狀 今迄無事なるに似て忽ちつと聲を發して仆者多し又殸なくして倒るゝ者あり何ども瞪目直視或ハ上竄く白沫を吐手足搐搦目瞤動或ハ偏引搖頭振身咬牙或ハ息絶脈も絶たるがごとく口開身輭にして死人の如なる者あり然ども ぬぐきハ一時又ハ半時短ハ暫時にして舊のごとくし醒きバ夢のごとし是癲癇の證候なり

療法　先皂莢（図説中風の條にあり）煎する汁を鼻孔の内へ灌入るべし涕唾を吐して甦る若皂莢なき時は冷水を吹かけ鼻へ灌入べし

或は　先取嚔法を用べし（取嚔法は前の中風乃條にあり）或は石を焼醋の中へ焠て其氣を嗅しむべし勿論頭髪を掣嚔を出さしむべし○服薬は熊膽小豆許を白湯にてとき灌下さしむべし○又方鈎藤鈎（薬店にあり）甘草一匁を水にて煎じ服さしむべし○又

方白礬（薬店にあり）末となし是を又挽茶五分煎じたる茶にて服すべし○又方辰砂（薬店にあり）二三分水にて灌下し或は熊膽のとき汁にて用るも最よし○百會（図説中風にあり）に灸すべし壮数に拘はらず甦て止べし

皂莢汁を灌入て甦て後涎唾を吐てやまざるは塩湯を吹かけてよし

血厥　又鬱冒といふ

病状　人平居疾なし忽死人のごとくにて動揺せず黙々人をしらず婦人にも此證多し

療法　半夏の末或ハ皂莢といふ薬店にあり猪牙皂莢とを用ゆべし常皂乃莢乾るもよし圖搐中風の條に出スの末を鼻に吹込嚔を取醋を火盆に傾け入まて烟を鼻中に衝入しめてよし

○梅の實乃熟したる肉を口中へぬり入るべし

梅實なき時ハ塩梅の肉にてもよし　○辰砂

の末湯にて五六分用てよし○又方川芎香附子此二味薬店末にあり等分白湯にて用ゆべし

波也宇知加太　先輩青筋と云病のよし云説何も穏ならず故に俗称を挙

病状　平居無事にして初ハ肩背徴し痛悶を覚へ後俄に肩張痛堅満て面色青惨唇黒手足厥冷或ハ悶亂し或ハ黙として精神恍惚となる速に救ざれバ死を

療法　急に肩背の堅く凝たる所を小刀様の刃物にて割き破り悪血を出すべし血多く出人心付たる後に刺たる痛ハ馬糞汁を塗ておくべし

服薬 青松葉を煎じ用べし急なる時ハ青松葉を嚼く病人の口をあけて其汁を吹込のましむべし○又方刀豆の實を末にして白湯にて灌ぎのますべし急なる時ハ刮て用ゆ○又方胡椒を末温酒にて服す

○又一説あり人俄に腹疞痛漸々に胸膈へ攻て煩躁悶亂し顔色青惨或ハ黧黒唇の色黒なり昏憒して死す

療法 速に下唇を反して鍼にて刺し又ハ小刀様の物を以て割て黒血を出すべし血一合餘も出せハ忽に愈るなり若一ヶ処割く血出ざる者ハ二ヶ所も割く血を出すをよしとす

此病海濱の漁人舟子なと往々患るものあり山陵に居る人此を患るを聞ず北國海濱にてハ此病を波伊と名づけ能其療法を知者多し他邦にハ知ざる処もありて死る人もあるよし聞及

ぬ異國の方書に云る沙病の中に絞腸沙なるべし

鍼暈 ちうしはて目をまハし倒るなり

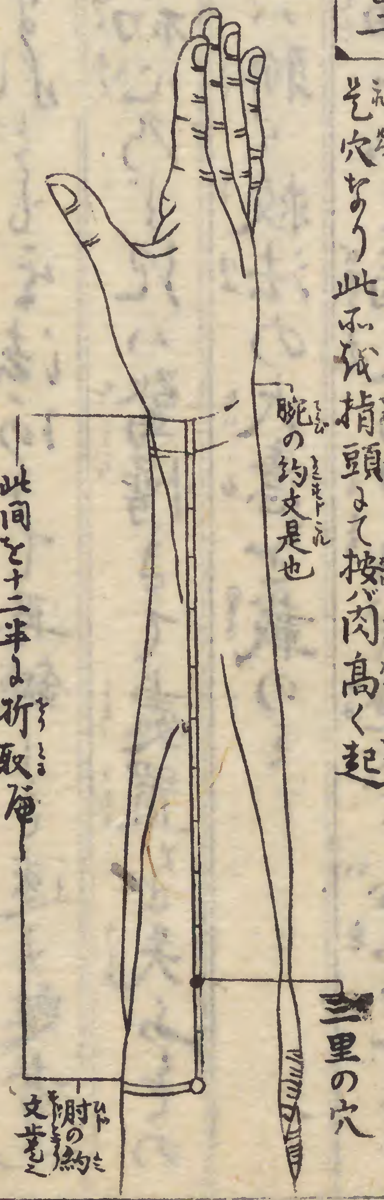
凡人鍼して暈倒ものあり鍼乃上工にもまゝあることなれども其法にありて再鍼して速に甦者也至て初心乃もの八驚愕きて處置を失ふものなれバ聊か救法の大意を載のミ

療法 袖をもつて病人乃口鼻を掩へバ息氣をふき回すものなり其時にあつき湯を與へ飲しむべし前法の如して氣回らざるハ手の三里に鍼[illegible]

○若肩井等上部に鍼して暈倒せバ足の三里に鍼してよし　足の三里図説前の中風にあり

手三里　此穴ハ肘の約文の上より手さきの方へ二寸に点すべし是穴なり此所を指頭にて按バ肉高く起

此穴を挨にハ腕の約文より肘の約文までの間を藁にて度り十二半に折一尺二寸半と定て此寸にて取べし



入浴暈倒　湯氣にあたるなり

人湯を浴て時を移し又ハ熱き湯に入て湯氣に中逆に眩暈して倒仆し人事識ざるに及或ハ衂血出ざるもあり

療法　先冷水を面に噴べし或ハ惣身に水を澆りかくるもよし其上にて塩水を飲しむべし又酢を一杯程のましむべし　中巻衂血の條考べし

酔船 船に酔 ○轎に酔 山に酔を附

人船に乗て眩暈或ハ嘔吐或ハ瀉頭痛煩悶(
る事あり

凡船に注たる人渇ありとも水を与飲しむ
べからず のましむれバ死に至ることあり

療法 急に童子の小便を飲しめてよし 若童便
なき時ハ自己の尿を飲べし ○又方厳醋を一
口飲てよし ○嘔吐止ざるハ半夏陳皮茯苓○

三味等分せんじ飲てよし○又方生蘿菔を擦
喫ふべし○又方梅肉を含てよし○又方硫
黄発燭に用ゆるを嗅べし
○人轎に乗漸々に風雲中に坐するがごとく頭痛
甚しく悪心をなし最甚ハ暈倒に至る
療法　速に熱湯の中へ生姜の絞汁を入拌飲しめ
てよし又半夏一味煎じ服す○又方辰砂あり薬店に
少許舌上に置白湯にて送下　凡此証冷水を飲べからず

○人終日嶮岨なる山中を経歴すると忽恍惚
として眩暈し顔色青惨人心地なく遂に倒
れて人事を知ず無性となる俗人山の神に譴
など云ものは是なり
療法　速に酒を燗して酔ほど喫て平地に臥しむ事
一時許にして精神旧に復す○又方酢を飲て
安臥しめてよし
○人の斬きたるか又ハ怪我して血など大に出

たるを傍より見て面色青くなり暈倒するし
あり前の方試用て甦るなり

廣恵濟急方上巻

国立公文書館
National Archives of Japan